

平成14年度

# 市原市内遺跡発掘調査報告

しい づ しん ぼやし 遺跡  
いな り だい 遺跡  
椎津新林遺跡  
稲荷台遺跡

2003

市原市教育委員会



## 序 文

市原市は、房総半島のほぼ中央にあり、温暖な気候と豊かな自然環境に恵まれております。そのため、有史以来多くの人々によってこの地で生活が営まれ、郷土の歴史が育まれてきました。国指定史跡の上総国分寺跡や国分尼寺跡、「王賜」銘鉄剣で知られる稲荷台古墳などは、これら先人の足跡の一端を、今に伝えるものです。

日本の経済はいまだ深刻な状況から脱しておらず、一頃の大規模開発などは影をひそめていますが、地域基盤の整備は着々と進められております。そのようななかで、開発行為と文化財保護とを調和させていくことは、今日の私たちに課せられた大きな責務といえます。

本報告書は、開発によって失われていく市内の遺跡について、国庫および県費の補助をうけて行った発掘調査の成果をまとめたものです。本書が、学術資料としてはもとより、多くの方々が郷土の歴史への関心を高め、埋蔵文化財の保護と重要性を理解していただくための資料として、広く活用されることを願っています。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書の刊行にいたるまでご指導・ご協力いただきました文化庁、千葉県教育委員会、財団法人市原市文化財センターをはじめ関係諸機関各位に、心より御礼申し上げます。

平成15年3月

市原市教育委員会  
教育長 竹下 徳永

# 例 言

- 1 本書は、国庫および県費の補助を受けて市原市教育委員会が主体となり実施した市内に所在する遺跡における発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査および整理作業は、市原市教育委員会の依頼により財団法人市原市文化財センターが実施し、報告書刊行は市原市教育委員会で行った。
- 3 本報告書所収の調査は下記の通りである。
  - (1) 椎津新林遺跡(センター調査コード セ360) 市原市椎津字新林2,210-1ほか  
仮設道路建設に伴う確認調査。対象面積4,161㎡のうち416㎡の確認調査を実施した。  
調査期間:平成14年3月11日～3月25日
  - (2) 稲荷台遺跡(センター調査コード セ364) 市原市藤井1-187・1-189-1  
個人住宅建設に伴う本調査。662㎡の本調査を実施した。  
調査期間:平成14年8月29日～10月10日
- 4 上記の発掘調査および本書の編集・執筆は、(1)を北見一弘が、(2)を牧野光隆が担当した。
- 5 稲荷台遺跡003遺構出土の獣骨については、上奈穂美氏(國學院大學博士課程)に分析・原稿を依頼した。
- 6 稲荷台遺跡の遺構実測図に使用した座標は平面直角座標第IX系であり、方位は座標北である。
- 7 稲荷台遺跡の遺物実測図において、遺物番号の下に種別を表してある。例えば、「須(酸)」は酸化焰焼成の須恵器であることを示す。土師器・瓦・鉄製品等は表記していない。

## 本文目次

1 椎津新林遺跡	1
2 稲荷台遺跡	5

## 挿図目次

### 椎津新林遺跡

第1図 椎津新林遺跡及び周辺の遺跡	1
第2図 椎津新林遺跡周辺地形図	2
第3図 遺構図及び遺物実測図	3

### 稲荷台遺跡

第4図 稲荷台遺跡周辺図(1/5,000・1/25,000)	6
第5図 調査前等高線図・エレベーション図	7
第6図 調査区全体図	8
第7図 001路面露出時等高線図	9
第8図 001・008土層断面図	11
第9図 001掘り形実測図・エレベーション図	12
第10図 001エレベーション図(2) ・001出土遺物垂直分布図	13
第11図 001出土遺物	14
第12図 005・006実測図・出土遺物	15
第13図 002・011・012実測図 ・出土遺物	17

第14図 010・014・010カマド実測図 ・出土遺物	18
第15図 010出土遺物(2)	19
第16図 010出土遺物(3)	20
第17図 010出土遺物(4)	21
第18図 010出土遺物(5)、010付近出土遺物	22
第19図 013実測図・出土遺物、 009出土遺物、遺構外出土遺物	24
第20図 003・007実測図、003出土遺物	26

## 表目次

第1表 出土獣骨一覧
第2表 下顎臼歯計測値
第3表 稲荷台遺跡出土遺物観察表

## 図版目次

図版1	椎津新林遺跡
図版2～11	稲荷台遺跡



川流域では、片又木遺跡(弥生時代後期、終末期、平安時代の集落)、不入斗遺跡群(弥生時代終末期の墓域、平安時代鍛冶工房、中世掘立柱建物群)などが調査されている。また、本遺跡西側を通る市道111号線は地元では「鎌倉街道」と呼称されており(文献9)、これに関連する遺跡との見解もある、椎津坂ノ上遺跡(古代道(推定))の調査がある。

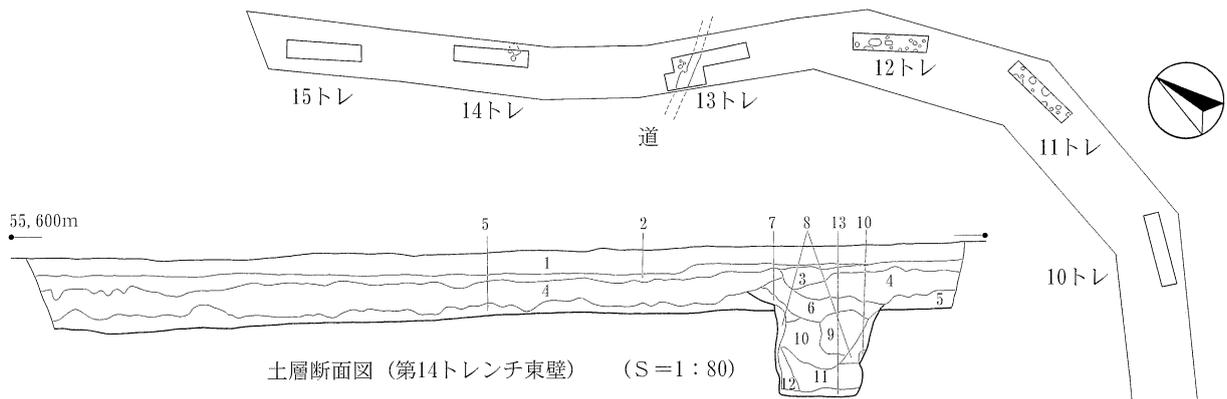
### 調査概要

調査は確認調査であるため、仮設道の範囲である幅7m～26m、総延長350m、調査範囲416㎡に、現況に合わせて極力偏りがないようにトレンチを設定し、重機による表土除去の後、遺構の分布と、密度、遺構の性格を確認し、記録をとるという手順をとった。水準は近隣の成果を持った点から移し、方位は磁北を使用している。

その結果、縄文時代の土坑9基、古代から中世の道跡1条を検出した(第3図)。基本土層は図に示したとおり、Ⅰ～Ⅲ層までが安定して確認できた地点(調査区北側)と、耕作による攪乱がⅢ層上位まで及ぶ地点(調査区南側)を確認した。現表土から遺構確認面としたⅢ層上面までは、第6トレンチが26cmほどで最も浅く、ここから南、北両方向に進むに従ってそれぞれ第1トレンチ70cm、第14トレンチ80cmと深くなってゆく傾向が捉えられる。遺構はこの北側と南側に偏在し、縄文時代の土坑は、Ⅲ層上位にある漸移層を掘り込んでいる。出土遺物は条痕文系を含む縄文時代早期を中心の土器数点と石鏃1点、平安時代土師器片であり、遺構に帰属するものは少なく、遺物の分布は全体的に希薄といえる。



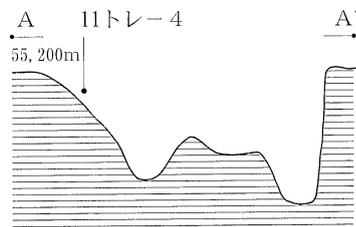
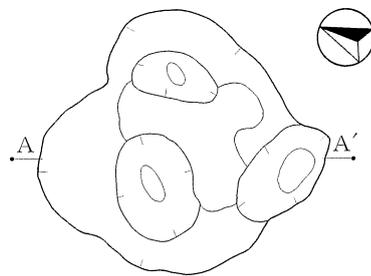
第2図 椎津新林遺跡周辺地形図 (市原市地形図 G-2 S = 1/5,000)



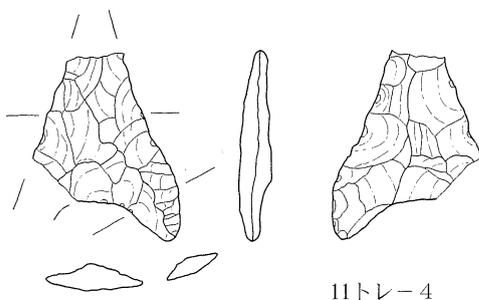
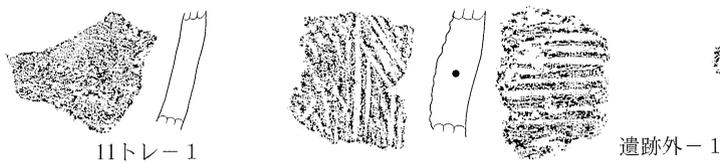
土層断面図 (第14トレンチ東壁) (S=1:80)

第14トレンチ東壁断面土層

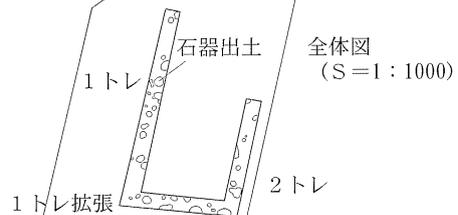
1. 10YR2/3黒褐色土 表土
2. 10YR3/3暗褐色土 II層
3. 10YR3/3暗褐色土 φ1~3mmの褐色粒多く含む。あまりまらない。
4. 10YR2/3黒褐色土 φ1~3mmの褐色粒少量含む。上層に比べややしめる。
5. 10YR2/4暗褐色土 ソフトロームがしみ状を呈する。漸移層上部。
6. 10YR3/4暗褐色土 φ1~3mmの褐色粒多く含む。ソフトロームがしみ状を呈する。
7. 10YR3/4暗褐色土 φ1~10mmの褐色粒少量含む。ソフトロームしみ状を呈する。
8. 10YR3/5暗褐色土 ソフトローム主体で、ややしめる。
9. 10YR2/3黒褐色土 φ1~3mmの褐色粒多く含む。ややしめる。
10. 10YR3/4暗褐色土 ソフトロームがしみ状を呈する。
11. 10YR3/3黒褐色土 φ1~3mmの褐色粒多く、炭化物流微量含む。ややしめる。
12. 10YR3/5暗褐色土 ソフトロームがしみ状を呈する。
13. 10YR3/3暗褐色土 φ1~3mmの褐色粒多く、炭化物流微量含む。ややしめる。



土坑実測図 (第11トレンチ) (S=1:20)



出土遺物縮尺  
(土器S=1:3. 石器1:1)



第3図 遺構図及び遺物実測図

## 遺構と遺物

縄文時代とした土坑の時期的な根拠は、帰属する遺物の出土に乏しいため、土層及び覆土の状況であり、必ずしも信憑性の高いものではない。しかし、掘り込みの形状からは明瞭なプランを持っているものと判断でき(第3図土層図)、また、周辺の調査でも、陥穴の検出が少なからず確認できることから、推し進めるならばそういった遺構の可能性が考えられる(第1トレンチ拡張部、3、12～14トレンチ検出土坑)。遺物の出土もこの遺構分布に重なるものである。

### 土 坑(第1トレンチ) (第3図)

長径76cm×短径70cm、深さ35cmを測り、平面形は不整形を呈する。底面は平坦面が少なく、小ピットが不規則に認められる。遺物は石鎌1点(1トレ-4)で、落ち込み付近の底面直上から出土している。

### 道 (第13トレンチ)

上端幅1.89m、底部幅1.45mで、断面形はほぼ均整のとれた逆台形を呈し、トレンチ内で、長さ2.80mを測り、東西方向に延びるとみられる。第13トレンチ西側は平坦面が続くため、尾根筋の道に繋がるか、北側から入り込む谷に降りる道になるのか分かれるところだが、東側は谷頭に対し直線的に向かっているため、この谷の斜面を降りる道になる可能性が高い。遺物は皆無であるが、覆土の状況から、古代から中世までの間に利用されたのではないかと考える。

### 遺 物 (第3図)

1トレ-1、-2、遺構外-1、-2は条痕文土器である。すべて表裏貝殻条痕が施されており、胎土中にはいずれも繊維を少量含む。1トレ-3は沈線文土器である。田戸下層式か。2トレ-1は撚り糸文土器か。

11トレ-1は無文である。胎土中には繊維は含まれない。前期の所産か。1トレ-4は凹基無茎石鎌。2.5cm×2.0cm、厚さ0.4cm、重量1.4gをはかる。先端部と片脚を欠損。砂岩製。

### 小 結

調査区は、尾根状の台地を横断する方向にあり、台地平坦部の土地利用の点でその偏りが確認できた。すなわち土地利用は台地の中心部よりも、谷頭に面した台地平坦面の端部に集中する傾向があるといえる。これまで隣接する地区の南北で調査が実施されており、本遺跡も縄文時代早期～前期とみられる遺物が出土したことはこれまでの成果に矛盾しない。しかし、本調査区はこれら集落の中心からは外れた中間地点である可能性が高い。また、古代以降の遺構も極めて希薄であり、以前より指摘されている「鎌倉街道」の呼称に関連する資料の提示はできない成果となった。

#### <参考文献>

- 1) 「椎津中林遺跡」『市原市文化財センター年報 平成59・60年度』 1985・1986 (財)市原市文化財センター
- 2) 『清水川台発掘調査報告書』 1983 (財)財団法人君津都市文化財センター
- 3) 『豆作台遺跡Ⅰ』 1999 (財)財団法人君津都市文化財センター
- 4) 『正源戸B遺跡・子者清水遺跡』 2000 (財)財団法人君津都市文化財センター
- 5) 『美生遺跡群Ⅰ』『Ⅱ』『Ⅲ』『Ⅳ』 1992・1993・1994・1998 (財)財団法人君津都市文化財センター
- 6) 『上大城遺跡発掘調査報告書』 1994 (財)財団法人君津都市文化財センター
- 7) 『片又木遺跡』『片又木遺跡Ⅱ』 1984・2000 (財)市原市文化財センター
- 8) 「片又木遺跡」『平成13年度市原市文化財センター遺跡発表会』 2002 (財)市原市文化財センター
- 9) 「椎津坂ノ上遺跡」『市原市文化財センター年報 平成7年度』 1998 (財)市原市文化財センター

## 2. 稻荷台遺跡

### 遺跡の位置と歴史的環境

調査区は、東京湾の旧海岸線から約3.5km内陸の標高28mほどの台地上にある。この台地は、村田川と養老川に挟まれた「市原台地」を構成する、南北に延びる樹枝状台地のうちのひとつである。稻荷台遺跡は通称「国分寺台遺跡群」の東端に位置する。上総国分尼寺やその尼寺に関連する坊作遺跡は、調査区から小支谷を挟んで南西に500mほどの場所から展開する。調査区は、稻荷台遺跡のなかでは北北東隅に位置する。稻荷台遺跡は、その建物構成や配置、犠牲獣をともなう祭祀遺構、出土遺物の特殊性から官衛関連遺跡と考えられる。その拡がりの東端を区画規定するラインが、今回の調査区を含む、いわゆる市原古道遺跡(=古代道・古代官道などと通称される)である。今回の調査では、主にこの道路跡の検出が調査前より注目されることとなった。

調査区には第5図・図版2で示すとおり、従来窪地が形成されており、この地形が道路痕跡を示すものであるといわれていた。調査区の小字名は「東家台」であるが、北側隣接地は「道成久保」(または「道成窪」と表記)と呼称し、その南北に細長い地割りとともに、まさに道路跡の存在を示すものであった。この地割りおよび窪地は、調査区より北方530mほどまで確認できる。その間、西側から小さい谷津が接しており、標高は23m前後まで低くおちる。

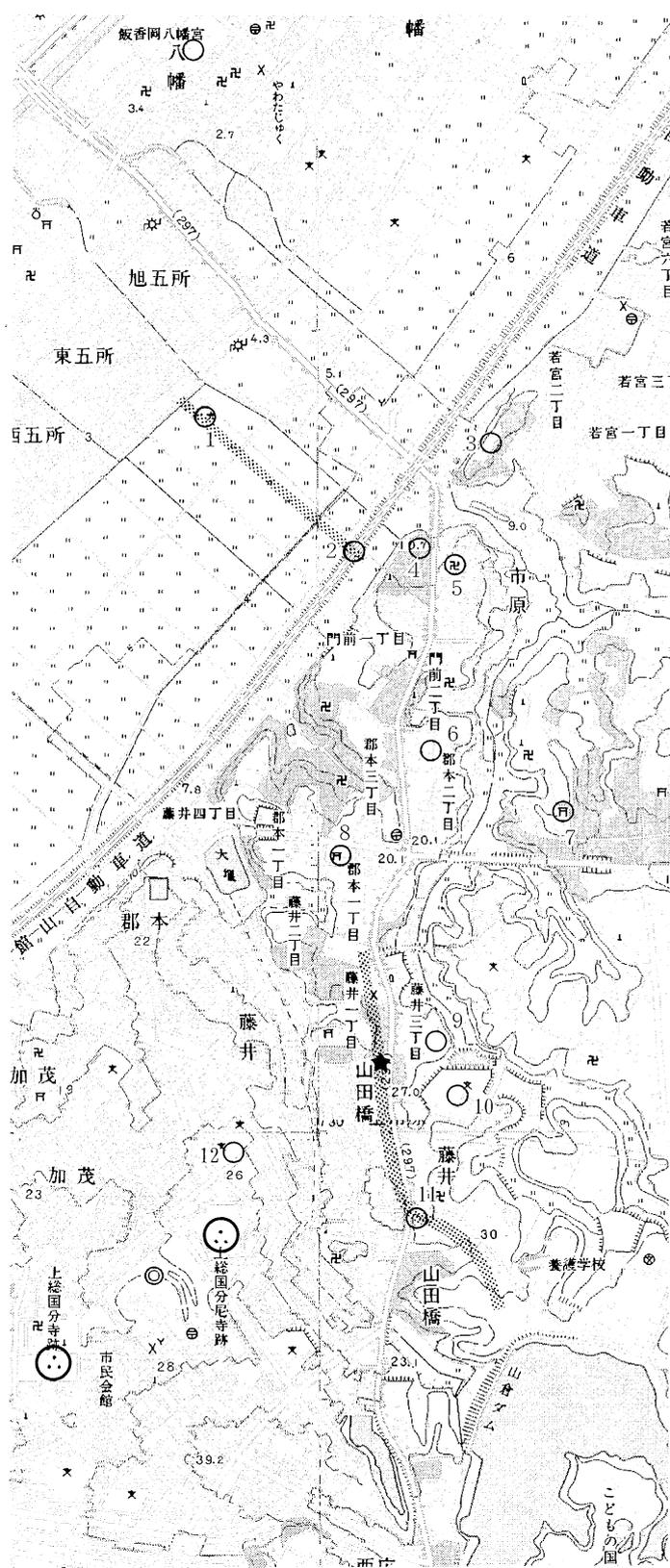
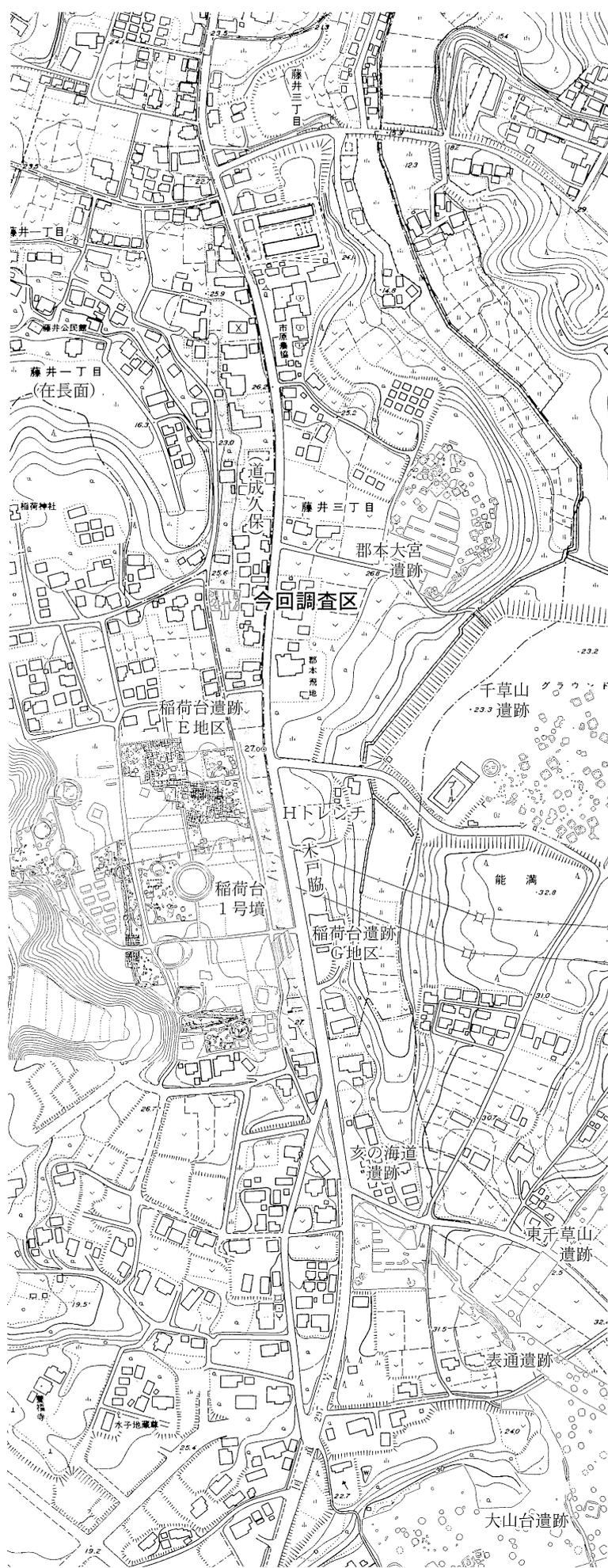
そこから道路痕跡は不明確となるが、推定される道筋は、現在の国道297号線に沿って北上する。そしてほぼ真北に1.4kmほど離れた市原条里制遺跡市原地区で両側溝をもつ道路跡が検出され、これに連絡する可能性が高いとみられている。すでに進路は北西へと変わっており、北西に650mの五所四反田遺跡での検出が最北端となる。このルートを経由して北上すると、西に郡本遺跡、東に古甲遺跡、そして光善寺廃寺跡などと、郡衛および国府推定地となり得る遺跡が配されている。現在の国道297号の郡本付近のルートは、結果的にこの古代道の地割りに沿っているものであろう。

調査区より南方でも道路跡の存在を示す地割りが顕著に残されている。発掘調査による検出例も多く、南方約1kmまでが復元できる状況である。調査区から南に170mほどの地点では、小規模のトレンチ調査(=稲荷台遺跡Hトレンチ)によって、またさらに南方100m程の稲荷台遺跡G地区では総延長約24mにわたって検出されている。この間西側には、「王賜」銘鉄剣を出土した稲荷台1号墳を始めとする古墳群が存在する。

山田橋亥の海道遺跡の北側調査区までは直線的なラインを復元できるが、現国道を隔てた南側調査区において、急激にその進路は南東へ向かう。そして東千草山遺跡へとつながることが予想されるが、ここの接続のためのルートを想定するとやや角度がきつくなるため、分岐点が存在する可能性も考えられる。このあたりから南側は企画性が希薄となり、路面規模も定まらない。さらに南の表通遺跡では分岐点が検出されており、大山台・大塚台遺跡では少なくとも計3本の筋になることが確認された。道はこのまま南下して山倉をぬけ、海士有木へと向かうルートが予想されている。

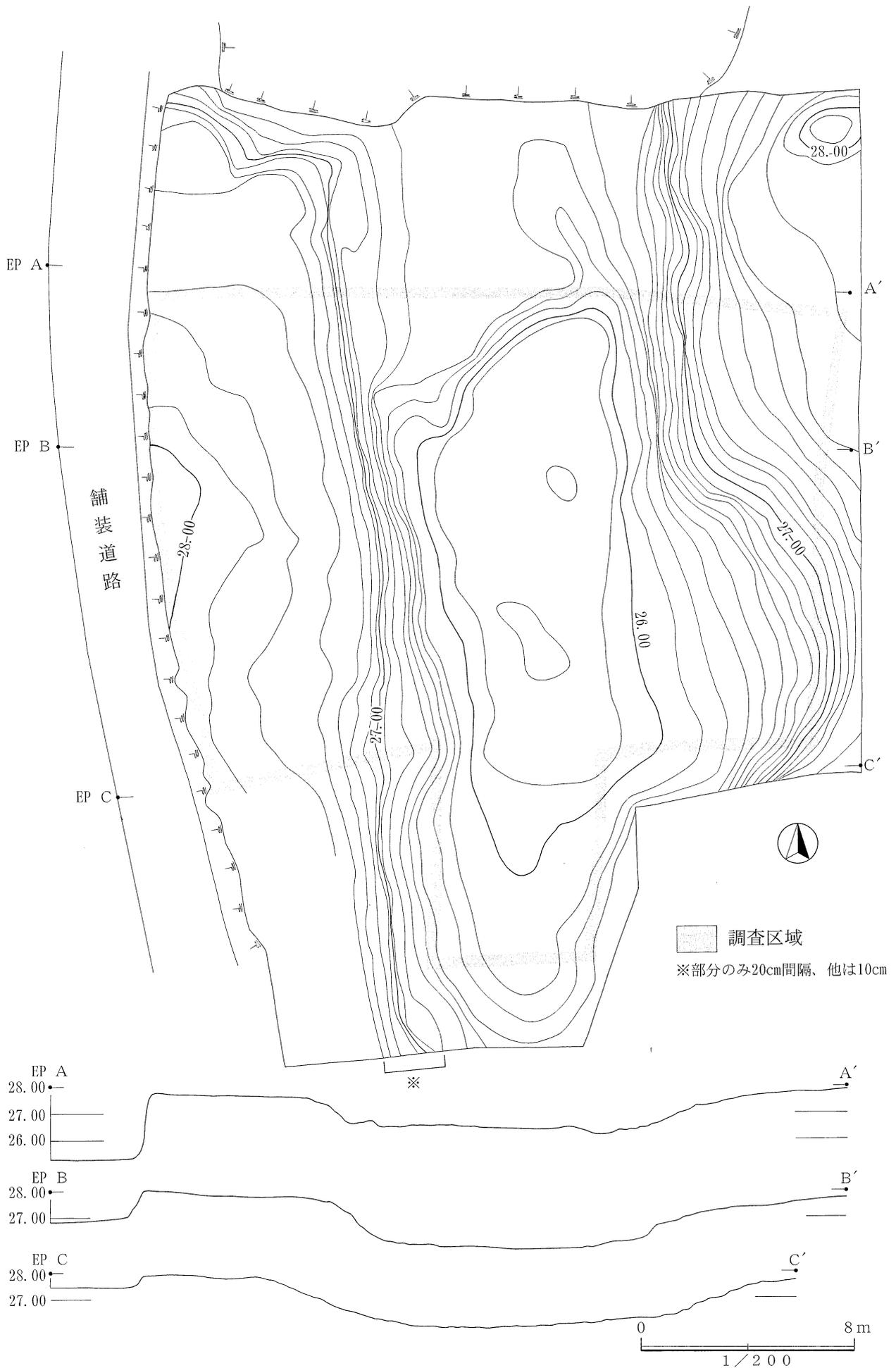
### 遺構と遺物

調査の結果、平安時代から中世にかけての道路跡1条、それに伴うとみられる溝跡3条、平安時代の竪穴建物跡5軒、同時期の土坑1基、中世の土坑およびピット群1基、時期不明の溝跡1条(007)、時期不明のピット群1群(013竪穴の西側および南側に計6基)が検出された。遺構番号は調査検出順につけてあり、順不同である。

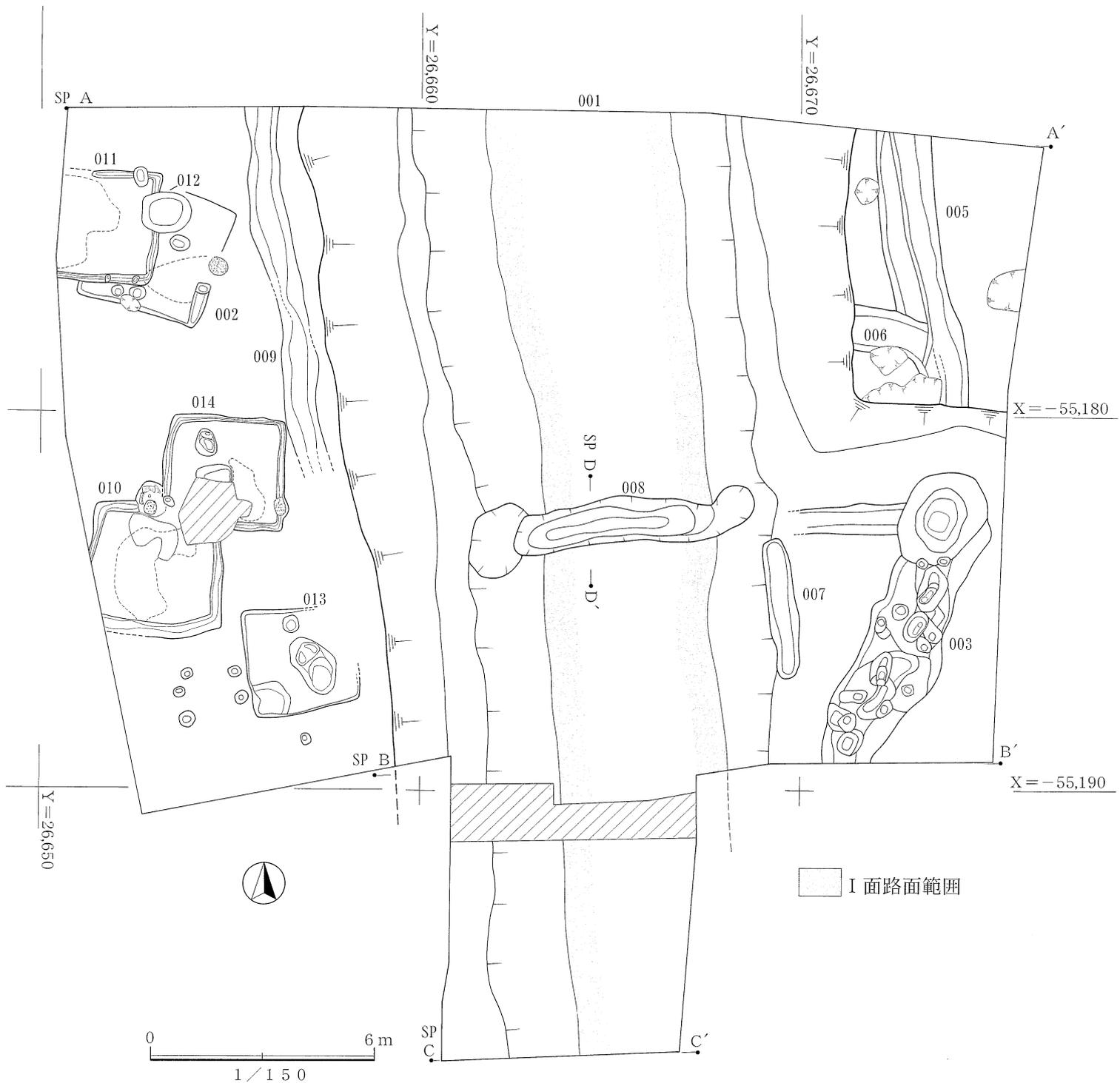


- ★ 調査地点
- 1. 五所四反田遺跡
- 2. 市原条里制遺跡市原地区
- 3. 白船城跡
- 4. 市原城跡
- 5. 光善寺廃寺跡
- 6. 古甲遺跡
- 7. 府中日吉神社
- 8. 郡本八幡神社  
郡本遺跡
- 9. 郡本大宮遺跡
- 10. 千草山遺跡
- 11. 山田橋亥の海道遺跡
- 12. 坊作遺跡

第4図 稲荷台遺跡周辺図 (1/5,000・1/25,000)



第5図 調査前等高線図・エレベーション図



第6図 調査区全体図

001道路跡 (第5図～第11図、図版2～4)

調査前の現地は住宅街のなかの竹林であり、孟宗竹を伐採後に現表土の状態、調査区を含む敷地範囲全体の等高線の測図を行った(第5図・図版2)。南北計測長は36.0m、落ち込み上面幅は最大16.6mとなる。調査区西側の現道際と北東隅部分が標高28m前後を測り、南北に窪んだ中央部分で25.8mほどである。調査区北端と南端ではほとんど比高差がみられず、むしろ中央部分がより深く窪んでいる。調査区の南側隣接地と北側隣接地は、すでに宅地造成が行われており、窪みなどの痕跡はみられない。東西ともに落ち込み斜面部の最大比高差は約1.9mである。調査区内南東隅は、後に中世の成形と判明したが、東側の斜面が大きく攪乱を受けて壊されているような状況に見受けられた。



第7図 001 路面露出時等高線図

道路跡は地山のローム層を大きく掘り込むことによって、切り通し(オープンカット工法)につくられている。総検出長は25.4m、最大掘り込み上面幅は北端に近い部分で14.8m、最も狭い部分は13.7mを測る。検出した路面進路の主軸はほぼ直線となり、真北より西に5°傾いて(N-5° - W)いる。

北半部分の両肩には、小規模な溝(009・005)を伴っている。東側の掘り込み線は、北端より7.3m南の部分でほぼ直角に東に折れる。そこより南には道の東肩部分となる掘り込み上面ラインは検出されず、約1m掘り下げられて傾斜面をなしており、中世の遺構および遺物が検出された。詳細は後述するが、結果的にこの道路跡自体も、中世前半段階においてかなり下層まで改作を施されているものであるという結論に達した。

道路跡の埋没土はいわゆるレンズ状堆積となっている。路面として使用されたとみられる硬化面は少なくとも3面が存在しており、下層から使用時期順にⅠ面～Ⅲ面と呼称する(第8図)。調査区中央部に、道路跡底面を横断もしくは遮断する形で008溝跡が検出されているが、この溝跡はⅡ面造成段階の構築であろうと考えられる。

Ⅰ面は灰色の硬質粘土を最下層の掘り形に充填した路面である。路面幅は4.3～5.1mを測る。路面高低差は、路面中心付近のやや低い部位で計測すると、南端壁C断面で24.42m、B断面で24.33m、北端壁A断面で24.05mを測り、総長24.5mの距離で0.37mの比高差(傾斜角1.51%)があり、北に向かって緩やかに傾斜することとなる。掘り込みレベルから底面までの比高差は3.0m前後である。

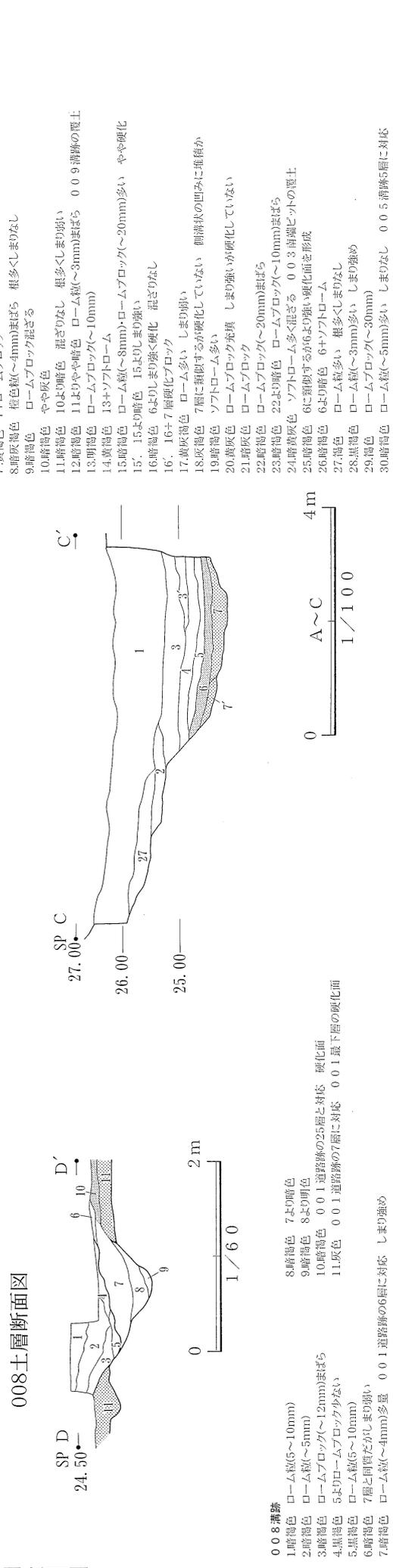
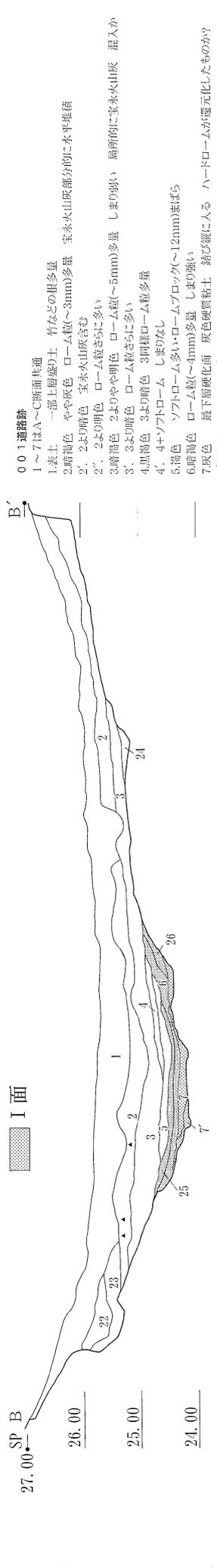
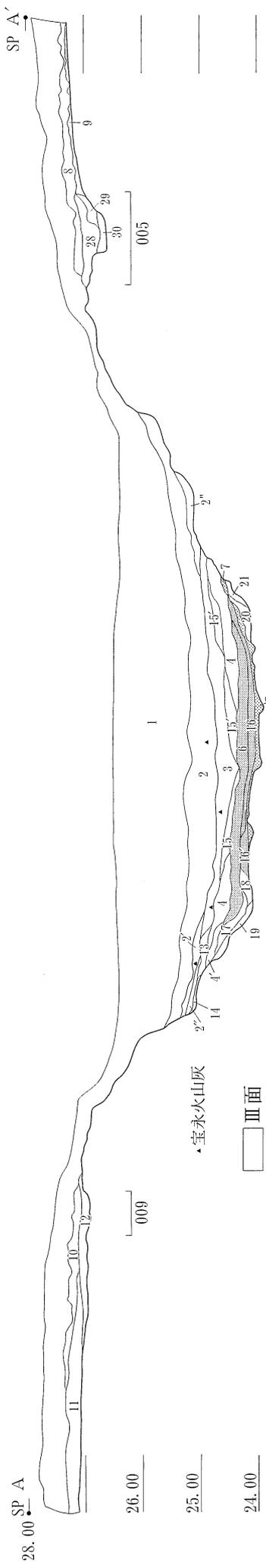
路面掘り形は、径15～50cm、深さ5～25cmほどの大小様々な円形および不整形のピットを配する。調査区中央付近および南端付近においては、いわゆる「波板状凹凸」を検出した。この波板状の凹凸は、掘り形のピットが隣接して列をなしているものである。充填されている灰色の硬質粘土は他のピットと同様な状況であり、底面最下層の掘り形全体に構築時期の差はないとみられる。ピットの中には瓦の破片が検出されることも多く、路面を安定させるための工夫であろう。灰色粘土はピットに充填された上に5～25cmほどの厚さで敷かれ、路面を形成する。この最下層であるⅠ面がほぼ露出した状態で第7図の等高線図を実測した。

底面の掘り形において、路面を横断する008溝跡より北側の路面両脇にのみ、小規模な側溝がみられる。西側は幅32～96cm、深さ2～9cm、東側は68～104cm、深さ2～4cm程度のものであり、側溝と呼ぶにはあまりに浅いが、溝状構造を意識していることはみてとれる。しかし、Ⅰ面は東側の溝の上層にも敷かれており、当初より西側の溝のみが露出した状態で使用されていた可能性が高い。南に170m離れたHトレンチの調査においても、深さ50cmほどの側溝が路面西側のみで確認されている。

掘り形のピットは、008溝跡北側に隣接した波板状凹凸よりさらに北側において、深めのピットが路面に沿って二列に並ぶ(図版2・3の下段参照)。この列状のピットと波板状凹凸は、なんらかの設計意識をもとに配置された路盤基礎工事の跡であろう。まともな側溝もなく、硬質の粘土を固めてつくったこのような路面では、水はけの問題はどうなるのか、疑問の残るところである。ただ調査中、雨天後の水はけは必ずしも悪くはなかった。

Ⅱ面(6・16・16'・25・26層)は、渥美・常滑などの中世遺物がこの層の下部まで入り込んでいることが判明した(第10図参照)ため、中世前半期に大きく改作がなされた路面であると考えられる。

路面は暗褐色～灰褐色土を厚さ15～30cmほど敷いてあり、Ⅰ面よりは硬化度合が弱い。路面幅はⅠ面より広くなり、南側で4.9m、北端で5.8mを測る。南北の路面レベルは、南で24.58m、北で24.34mを測り、総長25.4mで高低差は0.24m(傾斜角0.94%)と、Ⅰ面より緩やかな傾斜になる。この段階において、調査区中央に位置する008溝跡が掘り込まれたものと思われる。路面を完全に横断する形で掘り込まれた溝は、Ⅰ面掘り形を切る状態で計測すると長さ7.74m、幅1.02～1.23m、深さ40～41.6cmを測るが、実際にⅡ面から掘り込まれた状態なら推定幅2.0m、深さ70cm以上となる。溝の覆土にはⅡ面の硬化面土層が入り込んでいる。しかし、しまりは強いが硬化面とは言えない状態である。この溝が口を開けている限り、通常の路面として機能しないことは明白であり、板を渡して橋を架けることでもしない限り危ない。したがって、目的は往来の遮断、通行の自由を奪うこととなるであろう。軍事的な性格をもつ防御施設という見方を一つの可能性として考えなければならない。



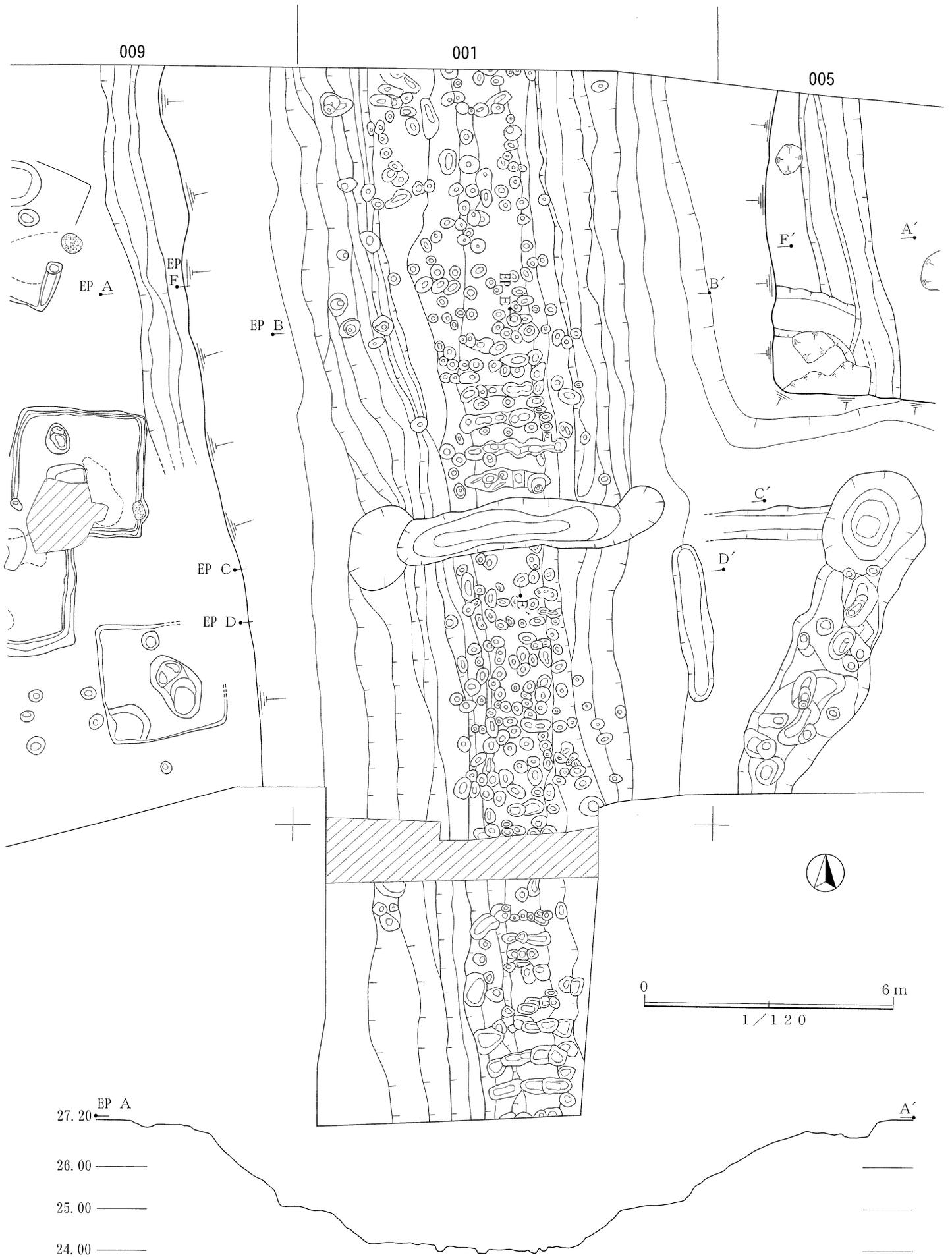
第8図 001・008 土層断面図

001 道路跡

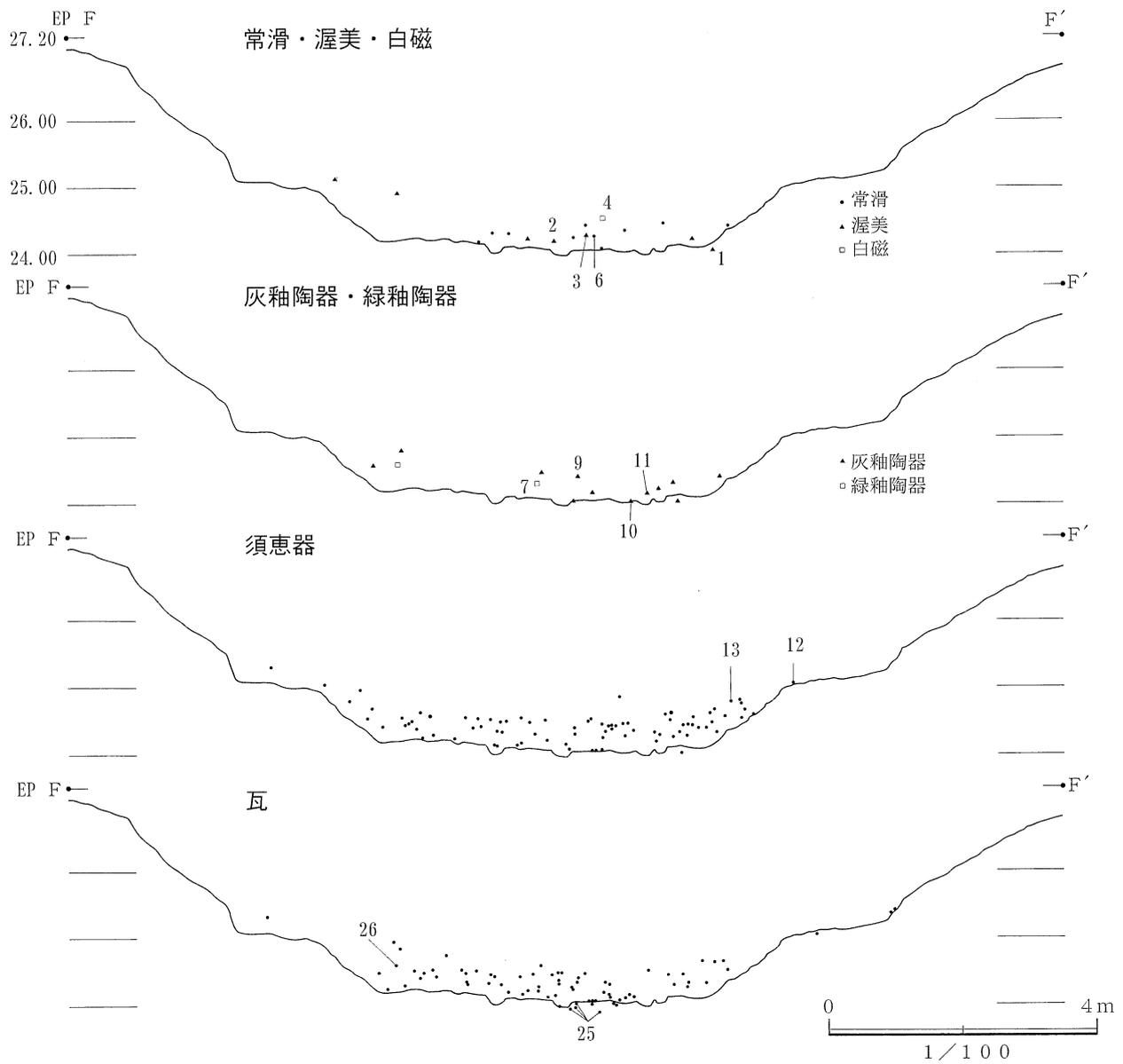
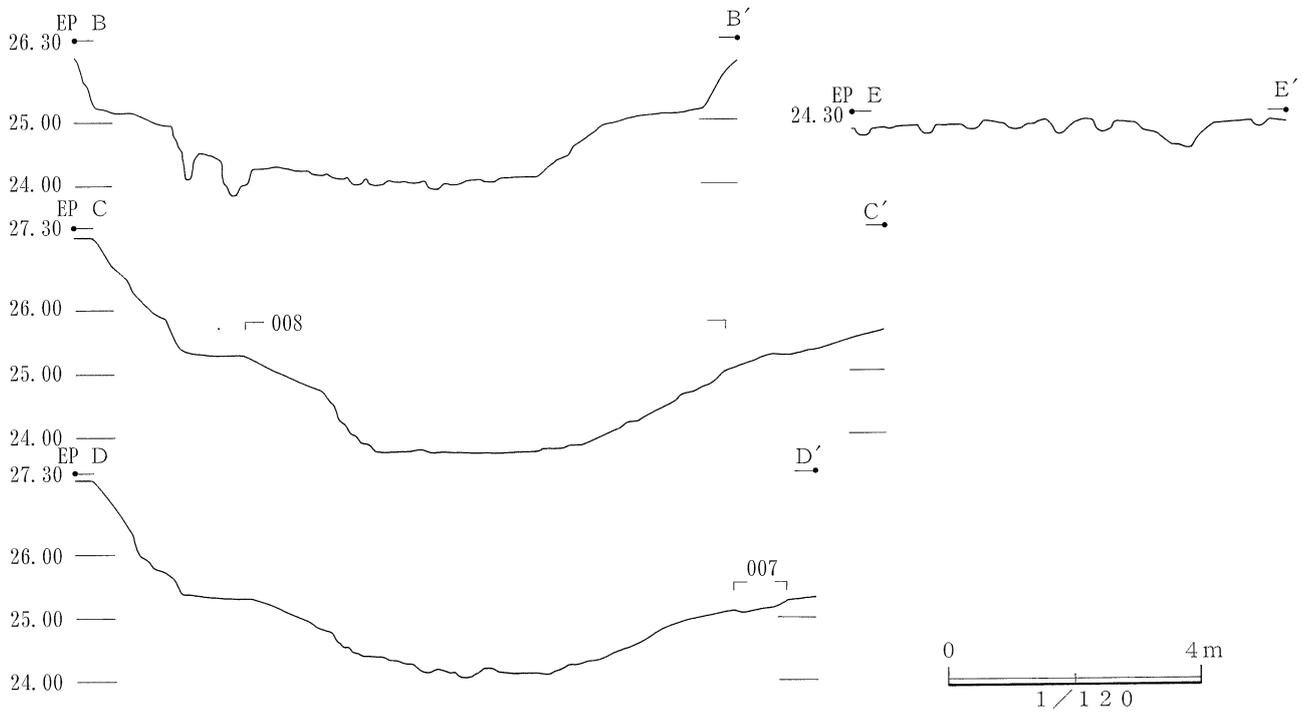
- 1~7はA~C断面共通
- 1.表土 一部上層盛り土 竹などの根多量
- 2.暗褐色 やや灰色 ローム粒(~3mm)多量 宝永火山灰部分的に水平堆積
- 2'. 2より暗色 宝永火山灰含む
- 2''. 2より明色 ローム粒さばりに多い
- 3.暗褐色 2よりやや明色 ローム粒(~5mm)多量 しまり弱、局所的に宝永火山灰 混入か
- 3'. 3より暗色 ローム粒さばりに多い
- 4.黒褐色 3より暗色 3階級ローム多量
- 4'. 4+ソフトローム しまりなし
- 5.褐色 ソフトローム多いロームブロック(~12mm)まばら
- 6.暗褐色 ローム粒(~4mm)多量 しまり強い
- 7.灰色 最下層硬化面 灰色硬質粘土 粘り強に入る ハートロームが還元化したものか?
- 8.暗灰褐色 橙色粒(~4mm)まばら 根多くしまりなし
- 9.暗褐色 ロームブロック混ざる
- 10.暗褐色 やや灰色
- 11.暗褐色 10より暗色 混ざりなし 根多くしまり強い
- 12.暗褐色 11よりやや暗色 ローム粒(~3mm)まばら 0.0.9 階級の覆土
- 13.明褐色 ロームブロック(~10mm)
- 14.黄褐色 13+ソフトローム
- 15.暗褐色 ローム粒(~8mm)ロームブロック(~20mm)多い やや硬化
- 15'. 15より暗色 15よりしまり強い
- 16. 16+7 層硬化ブロック 混ざりなし
- 17.黄灰褐色 ローム多い しまり強い
- 18.灰褐色 7層に類似するが硬化していない 側溝状の凹みに堆積か
- 19.暗褐色 ソフトローム多い
- 20.黄灰色 ロームブロック充填 しまり強いが硬化していない
- 21.暗灰色 ロームブロック
- 22.暗褐色 ロームブロック(~20mm)まばら
- 23.暗褐色 22より暗色 ロームブロック(~10mm)まばら
- 24.暗黄灰色 ソフトローム多く混ざる 0.0.3 南端ビートの覆土
- 25.暗褐色 6に類似するがより強い硬化面を形成
- 26.暗褐色 6より暗色 6+ソフトローム
- 27.褐色 ローム粒多い 根多くしまりなし
- 28.黒褐色 ローム粒(~3mm)多い しまり強い
- 29.褐色 ロームブロック(~30mm)
- 30.暗褐色 ローム粒(~5mm)多い しまりなし 0.0.5 階級5層に対応

008 溝跡

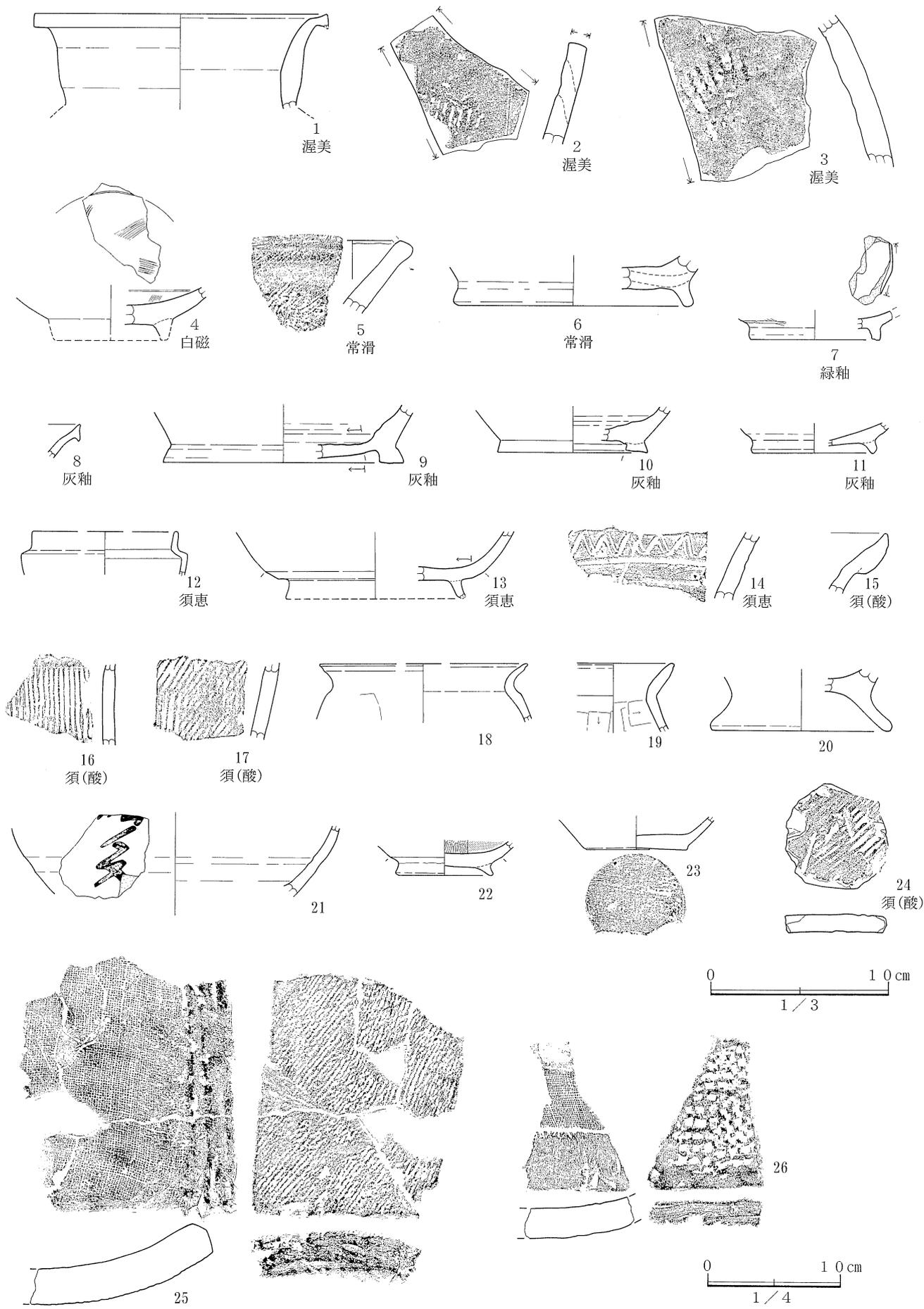
- 1.暗褐色 ローム粒(5~10mm)
- 2.暗褐色 ローム粒(~5mm)
- 3.暗褐色 ロームブロック(~12mm)まばら
- 4.黒褐色 5よりロームブロック少ない
- 5.黒褐色 ローム粒(5~10mm)
- 6.暗褐色 7層と同質だがしまり強い
- 7.暗褐色 ローム粒(~4mm)多量 0.0.1 道路跡の6層に対応 しまり強め
- 8.暗褐色 7より暗色
- 9.暗褐色 8より明色
- 10.暗褐色 0.0.1 道路跡の25層と対応 硬化面
- 11.灰色 0.0.1 道路跡の7層に対応 0.0.1 最下層の硬化面



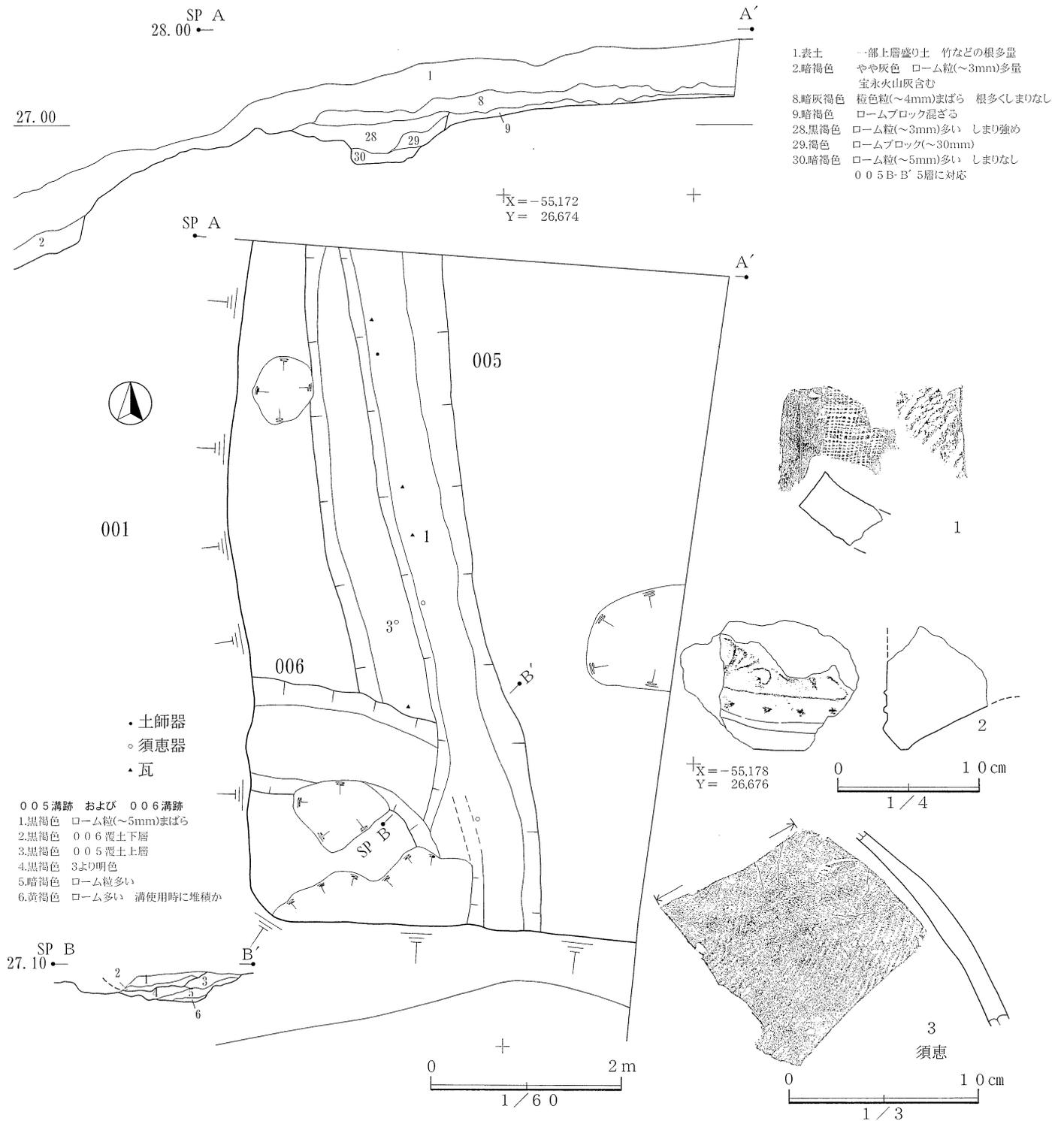
第9図 001掘り形実測図・エレベーション図



第10図 001エレベーション図(2)・001出土遺物垂直分布図



第 11 図 001 出土遺物



第12図 005・006 実測図・出土遺物

最上層のⅢ面(15・15'層)は、調査区北壁(A-A'断面)において確認したものであり、平面的には捉えられなかった。幅5.26mを測るが、水平な路面を意識しておらず、すでに路面の調整や掃除などをやめてしまった最終段階のものであろう。Ⅲ面は、Ⅰ面やⅡ面に比べて硬化の度合はさらに弱い、自然堆積によるしまり具合ではないとみられる。

埋没土中の出土遺物は、3層下部あたりから下層にかけて検出された。総量は、土師器4,880.2g(内黒219.5g・比率4.5%)、須恵器5,019.0g、灰釉387.7g、緑釉9.8g、瓦9,875.0g、渥美605.2g、常滑435.2

g、白磁44.4gとなる。中世前半期の常滑や渥美などの陶器片が須恵器や灰釉陶器に混ざっており、24.25m前後まで入りこんでいることが判明した。このレベルはⅡ面の下部～Ⅰ面の直上面に相当するもので、第11図3の渥美甕片はB断面付近のⅠ面直上から出土している(図版4)。上層からの部分的な掘り込みなどは認められず、Ⅱ面の造成時に入りこんだものと考えられる。

道路跡の前後の接続なども考慮すると、路線は少なくとも奈良～平安期につくられたものであり、土質や包含遺物の差から、最下層の硬化面(Ⅰ面)は、初期の路面をとどめている可能性も考えられる。中世において周辺の地形を変える成形を行っており、それに伴って切り通しの掘り込み斜面など、特に両斜面途中の平場や東側斜面自体は、拡張している可能性が高い。成形面と008溝跡の位置などにもなんらかの機能的な結びつきがあることも予想される。

#### 005および006溝跡 (第12図、図版4・10)

幅1.36～1.52m、深さ34.5～41.6cmを測り、西側に幅50cm、深さ10cmほどの段がつく構造である。南北に総長7.5mにわたって検出され、中世成形面によって切られている。005溝跡は、道路跡とともに南へ延びていたものであろう。覆土は黒褐色から暗褐色を呈し、対岸の竪穴や009と同時期であると思われる。001道路跡の東側掘り込み上面線に沿って構築されたものであり、対岸の009溝跡と対を成すものであろう。道路跡に対して区画する溝や、土砂が流れ込まないための防砂溝などの機能的なもの等が考えられよう。覆土より均整唐草文軒平瓦や須恵器甕片が出土している。

006溝跡は幅1.2m、深さ13.8～15.7cmであり、長さ2.12mが検出されている。001道路跡および005溝跡などとは方向も異なり、005溝跡にぶつかる形で切っていることから、これらの遺構が埋没した後の所産と考えられる。

#### 009溝跡 (第6・13・19図、図版5・10)

幅68～84cm、深さ6.8～23.8cmを測り、長さ9.8mにわたって検出され、001溝跡の西側掘り込み上面線に沿って構築され、対岸の005溝跡と対をなすものと考えられる。覆土は暗褐色を呈し、出土遺物より同時期の遺構とみられる。014竪穴跡の東脇で消失している。検出したのは底面付近であって、当時はさらに上層から掘り込まれていたことを伺わせる。覆土上層より、須恵器の圈脚円面硯の脚部(第19図1)が出土しており、005の均整唐草文軒平瓦とともに、古相を示すものである。

#### 002竪穴 (第13図・図版5・9・11)

**遺存状況** ほぼ壁なし 床面カマド前一部のみ残存 竹の根による攪乱激しい 覆土は暗褐色土  
重複関係にある011竪穴の周溝上に床面を構築しており、012土坑には切られる

**規模** 3.36m×3.32m ほぼ正方形 **壁高** 0～7.3cm **主軸方向** E-16° -S

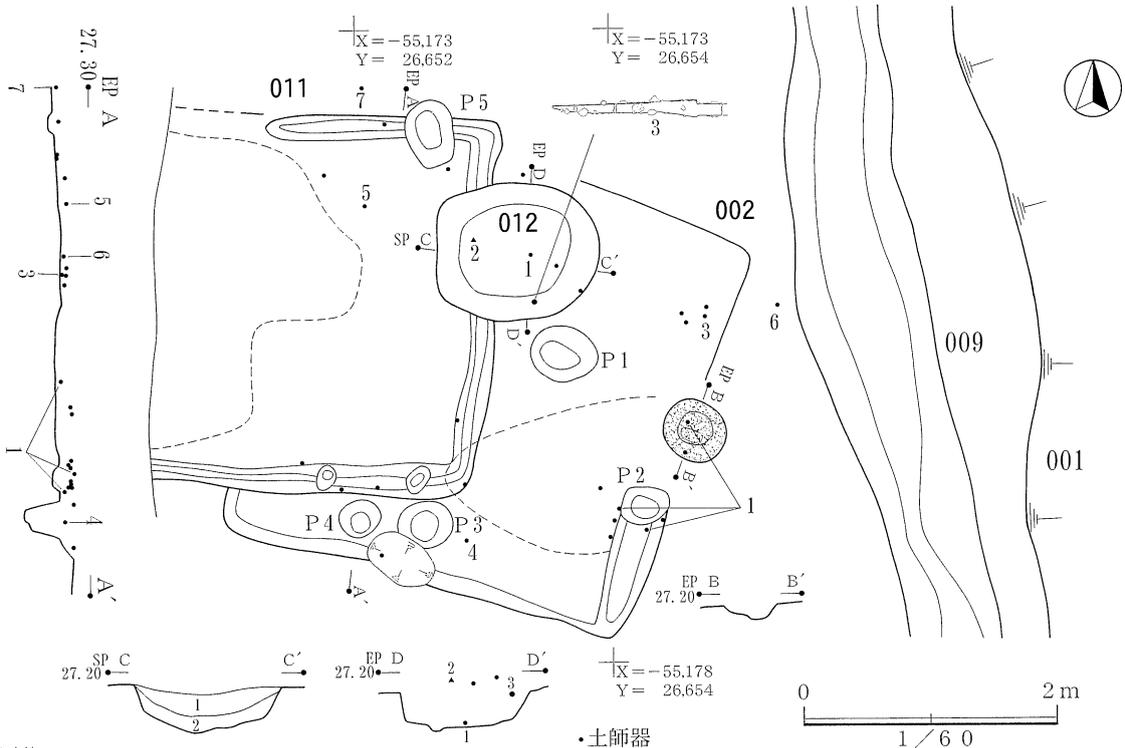
**周溝** カマド跡の右手に一部のみ残存 幅24.0～36.0cm・深さ2.9～4.3cm

**ピット** 根による攪乱で判別しにくい状態であったが、床面より下層の掘り形である可能性が高い。柱穴は検出されず。深さ P1:34.1cm、P2:13.4cm、P3:10.8cm、P4:27.0cm

**床面** カマド跡前付近硬化 ロームブロックによる貼り床 床面上にカマドの白色粘土が散る

**床面レベル** 27.18m前後 **カマド** 西南西壁中央に位置し、浅い掘り形(ほぼ円形、深さ10.1cm)と焼土跡のみ残存。 **備考** 攪乱が激しく当初平面プランが明瞭に見えなかったため、011竪穴と002竪穴付近の出土遺物はすべて002竪穴出土遺物として扱った。

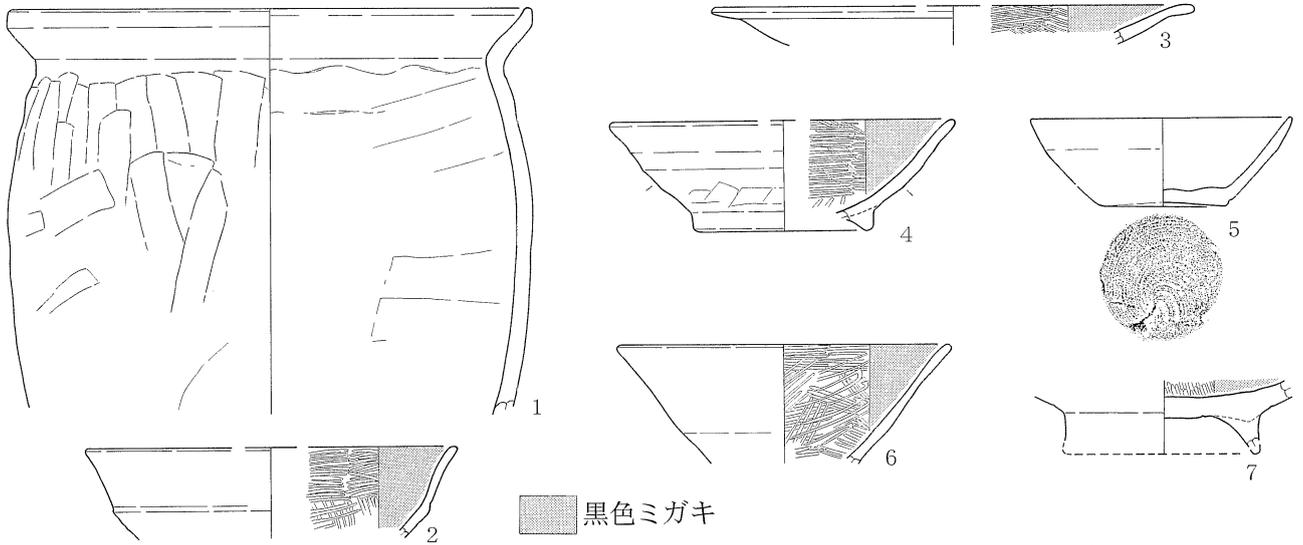
**遺物** 土師器1,497.7g(内面黒色ミガキ223.2g・比率14.9%)、灰釉8.5g、須恵器(酸化焰焼成)12.5g、



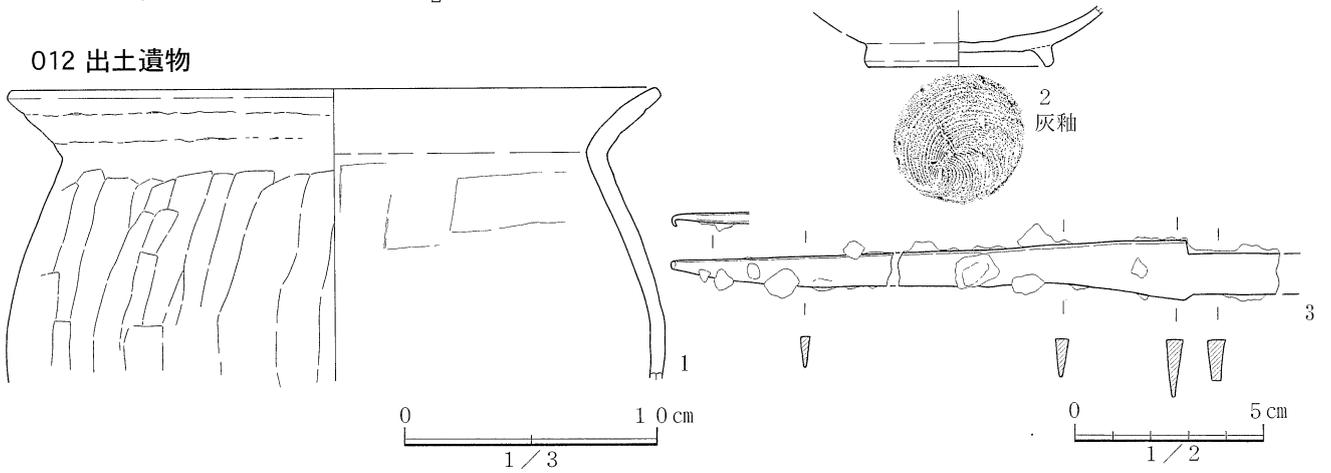
012土坑

- 1.黒褐色 ローム粒(~5mm)多く含む 根が多くしまり弱い
- 2.黒褐色 1よりやや暗色 ローム粒少ない

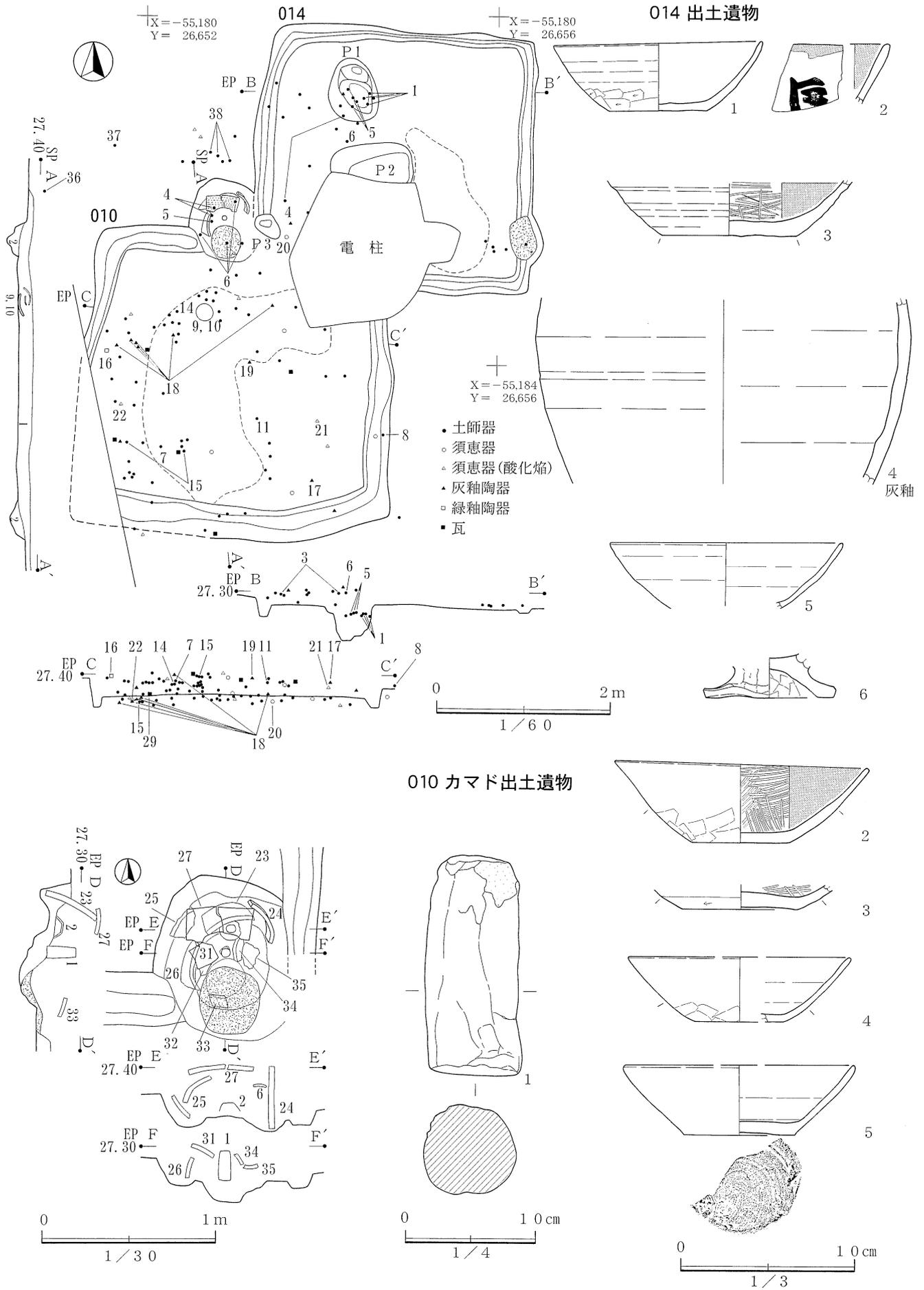
- ・土師器
- ・灰釉陶器



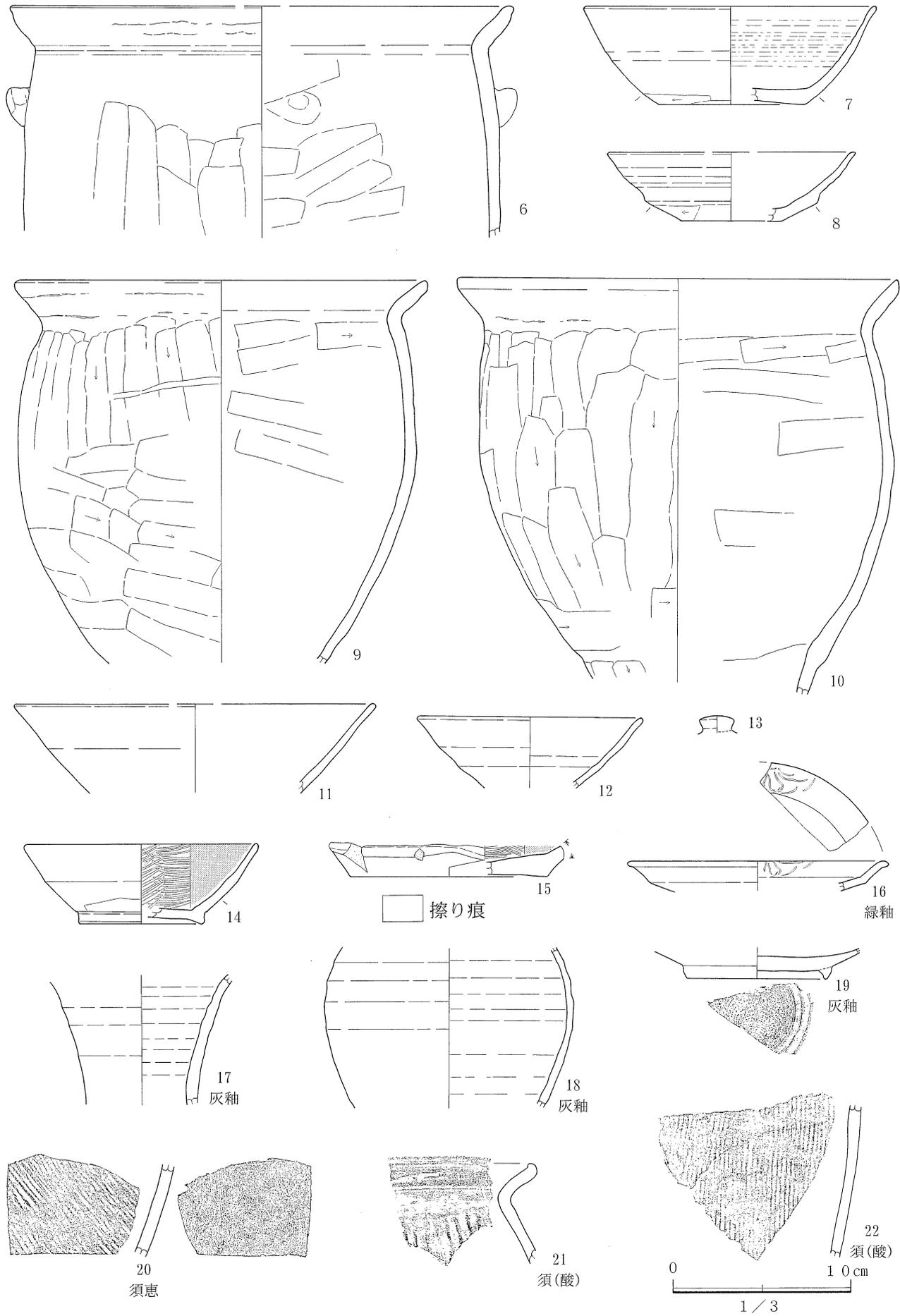
012 出土遺物



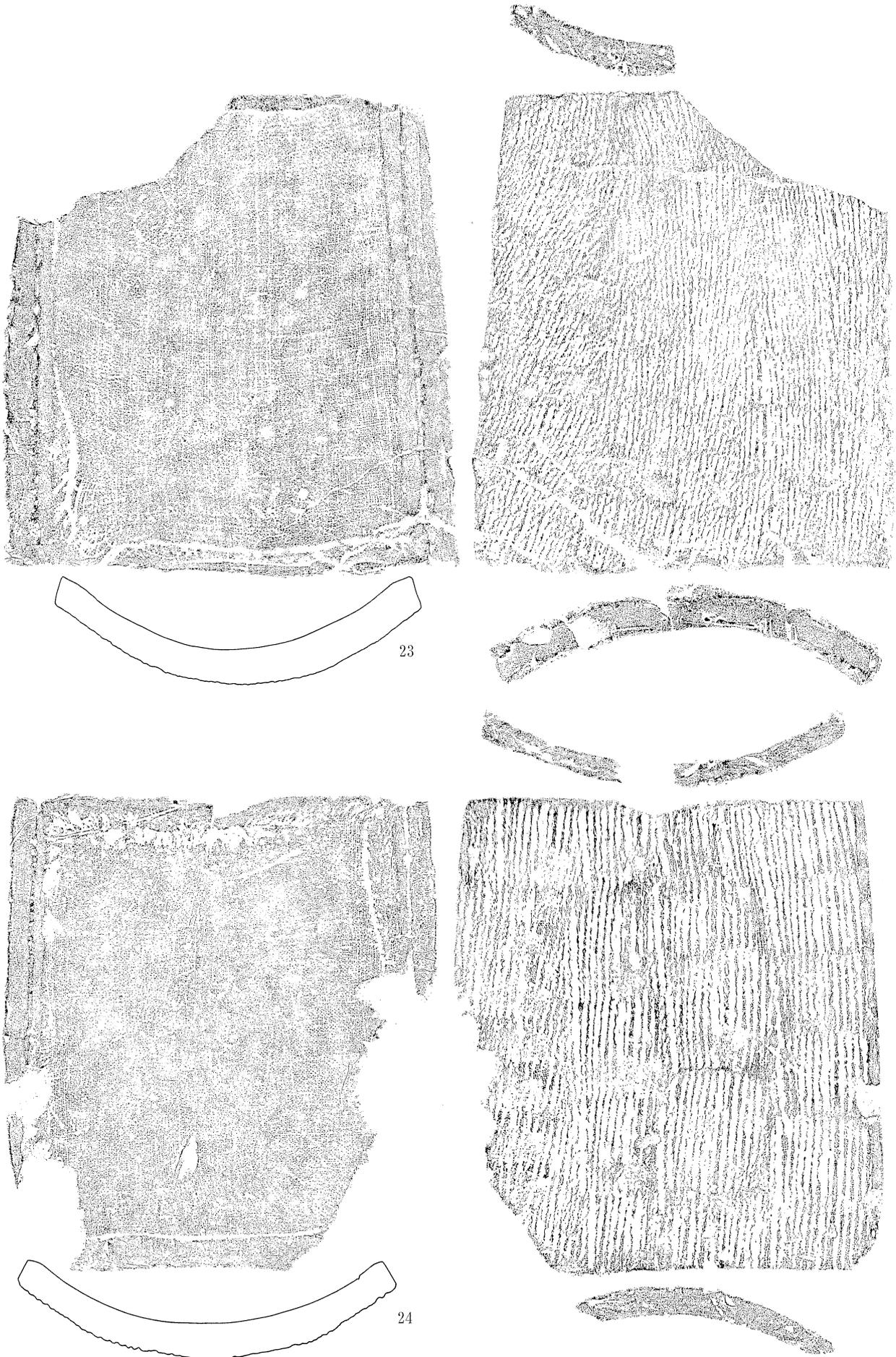
第13図 002・011・012 実測図・出土遺物



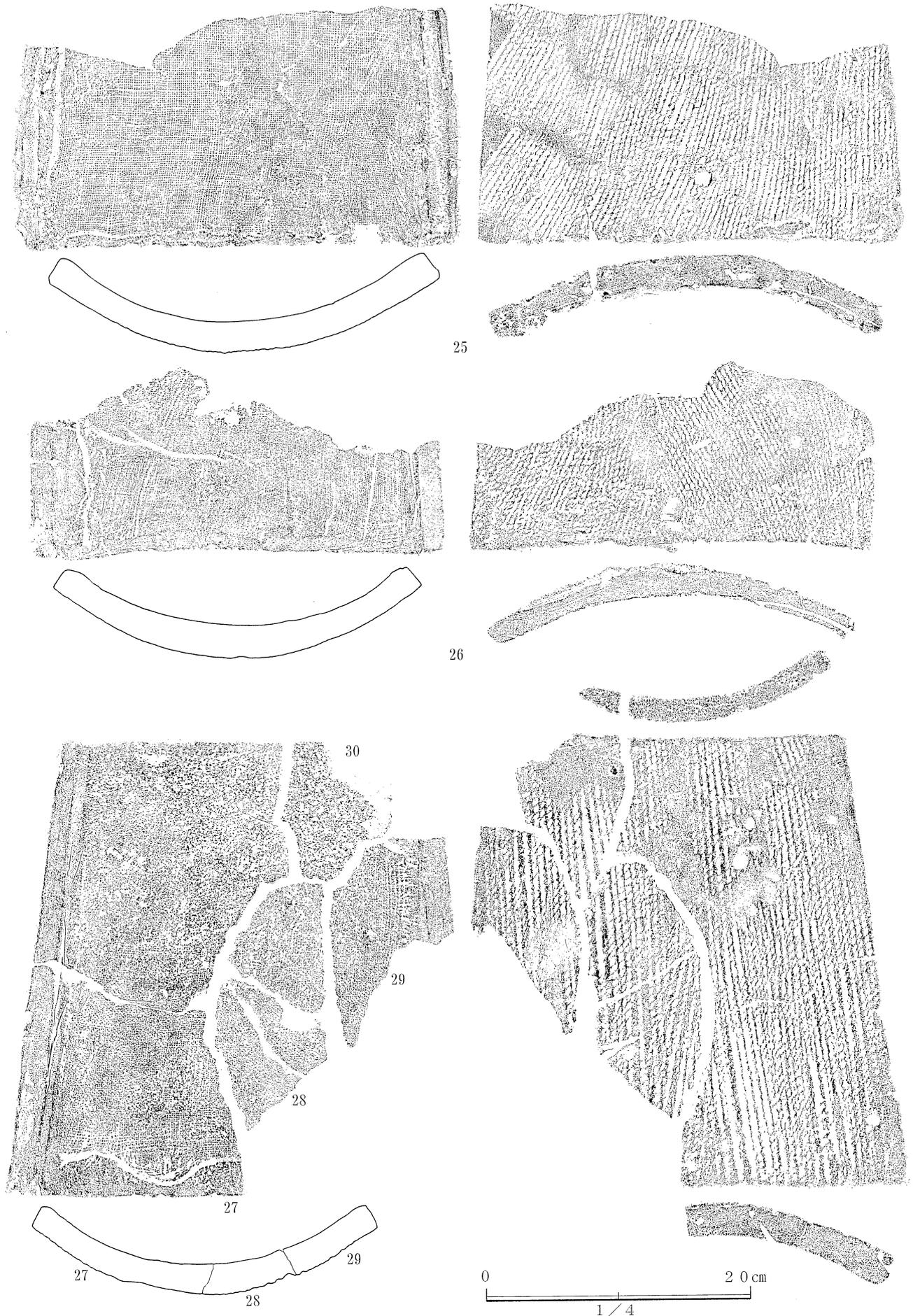
第14図 010・014・010カマド実測図・出土遺物



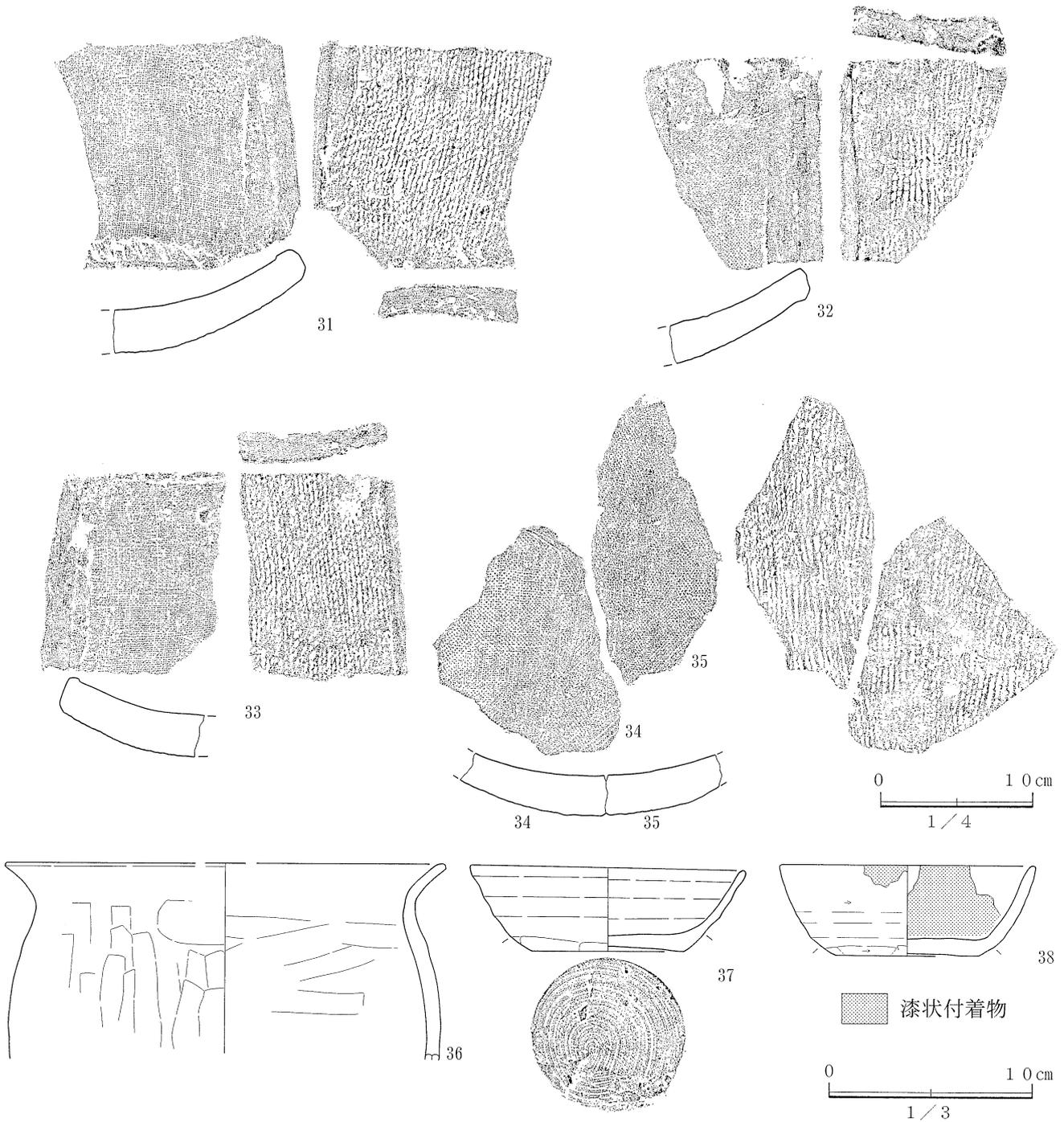
第 15 図 010 出土遺物(2)



第 16 图 010 出土遺物(3)



第 17 図 010 出土遺物(4)



第 18 図 010 出土遺物(5)、010 付近出土遺物

渥美16.0g 他の豎穴に比べて内黒土器の比率が高いことが特徴としてあげられる。第13図3の内面黒色ミガキの皿は、この地域の特色を現していると言える。

011 豎穴 (第13図、図版5・9・11)

遺存状況 002と重複 竹の根による攪乱激しい 西側推定30cmほど現在の道路によって切られているため西壁残存せず 覆土は暗褐色土 柱穴・カマドは検出されず カマドは西壁か

規模 2.8m以上×3.02m 正方形か 壁高 0~6cm 主軸方向 W-4°-N 周溝 幅14.0~31.0cm・深さ0.4~9.6cm ピット P5:深さ47.0cm 床面 西側半分のみ硬化 貼り床 一部床面上に白色粘土が散る 床面レベル 27.12m前後 002 豎穴より3~6cm低い 遺物 この

堅穴に伴う可能性のある遺物は第13図5と7であるが、002堅穴との床面レベル差はほとんどないため、判別し難い。一括遺物もすべて002堅穴出土遺物として扱い、調査した。

#### 012土坑（第13図、図版5・9・11）

覆土は黒褐色を呈し、根によって攪乱された確認面においてもこの土坑だけは明瞭に見えていた。他の遺構の覆土と比べてかなり黒色が強い。002・011堅穴を切って掘り込まれていると考えられる。長径1.29m、短径1.09m、深さ39cmである。覆土上層より灰釉陶器の椀底部および刀子が出土しており、底面付近より土師器甕口縁～胴部片とともに白色粘土を含む土塊が検出されている。

**遺物** 土師器409.0g(内面黒色ミガキ21.9g・比率5.4%)、灰釉椀底部1点90.3g

#### 010堅穴（第14～18図、図版5～8・10・11）

**遺存状況** 014堅穴と北壁東側で重複、南西隅は現道の下になり、北東隅は電柱の基礎のため未調査、他の4軒の堅穴より壁の残りは良い **規模** 3.58m×3.58m ほぼ正方形

**壁高** 9.8cm(東壁付近)～24.6cm(北西隅) **主軸方向** N-1° - E **周溝** 幅16.0～36.0cm・深さ9.0～17.9cm **柱穴・ピット** 検出されず **床面** カマド前～南壁付近にかけて硬化 貼り床

**床面レベル** 27.15m前後 掘り形は壁際および特に四隅を低く掘り下げる

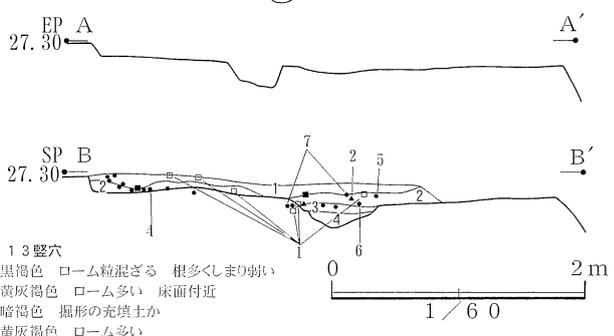
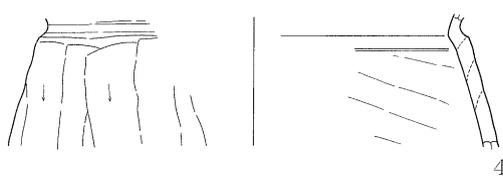
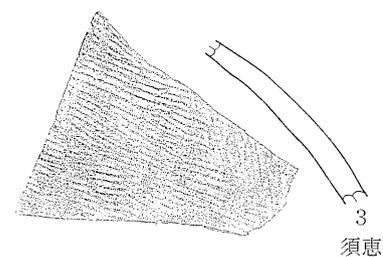
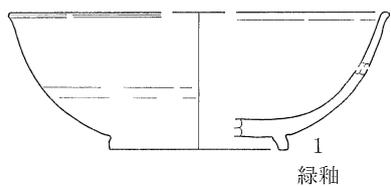
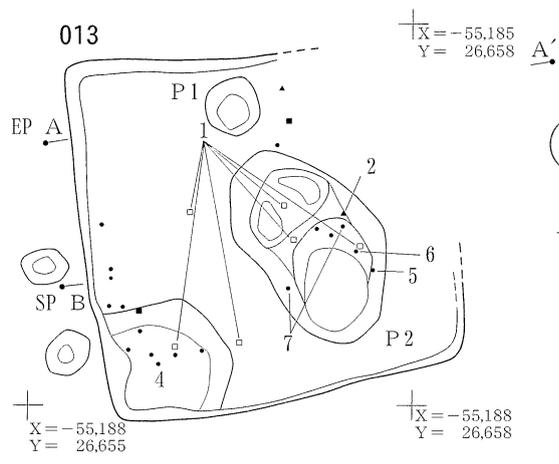
**カマド** 北壁中央に位置。多量の平瓦(18点、16,426.1g)を芯材として使用しており(第14・16～18図、図版5・8参照)、構造を十分に復元できる状態で残存していた。堅穴の確認面より16cmほど上面において、天井部にかげられた瓦(27)と壁部分として半環状に直立して立てられた瓦(24・26)の端部が露出していた。瓦の周囲は暗褐色土で覆われており、カマド内外においてほとんど白色粘土はみられなかった。そのため、支脚を検出するまでは、カマドであることを断定しなかった。白色粘土はカマド前の床面に少量散見されたため、カマドの外壁面などには使用されていたものと思われる。

カマドの基本構造は、左壁(左ソデ、26)・左奥壁(25)・最奥壁(23)・右奥壁(24)としての瓦を直立させて埋め込み、その上に天井部の瓦(27)をのせたものである。その他に8点以上の小片を補強材として使用している。カマドの内面となる凹面は、激しく被熱してススが付着している箇所がみられるため、各瓦は燃焼部に対しては露出していたものであろう。煙道は検出されなかった。

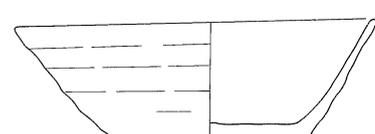
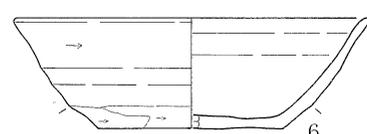
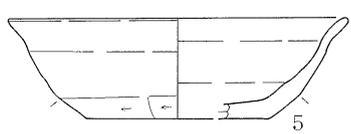
天井部の瓦は、焚き口からみて奥の上面に、最奥壁(23)および左奥壁(25)用の瓦の上に置かれ、ちょうど支脚の上方にあたる部分に、甕や甑を据え付けるためのかけ口を半円状に割って作り出してある。その瓦を割った部分(28)は、さらに上層に浮いて出土した。これらと同一個体である29は堅穴の床面から、30はカマド焚き口付近から出土している。この28～30は、ススの付着箇所や割れ口の磨耗度合などから、カマドの別部位の芯材としてそれぞれ使用されていたと考えられる。同様に34と35も同一個体であり出土位置も近いが、すでに割れた状態で右壁部分(右ソデ)に使用されていたものであろう。右壁部分には、瓦を埋め込み据えるための掘り形が検出されなかった。24より手前の右壁芯材としての大きな瓦が確保できなかったのであろうか。27・28を加工して天井部材に使用したということは、右壁の強度よりかけ口奥の天井強度を優先したことになるであろう。

直立していた支脚(1)は原位置を保っているとみられる。燃焼部に向いていた面はかなり表面の剥離がみられ、奥側の面は上半部のみ剥離していた。燃焼部底面はそれほど激しい被熱痕跡はみられず、焼土の堆積量も多いとは言えない。支脚の奥、つまりカマドの最奥部には、口縁部のみ4/5程欠損している内黒の杯(2)が伏せて置かれていた。外面にはやや被熱痕跡が見られ、そこに伏せて置かれていたものと考えられる。

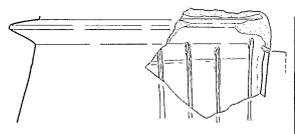
013 出土遺物



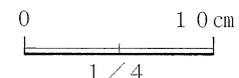
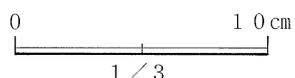
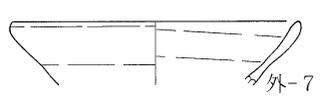
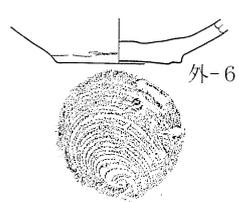
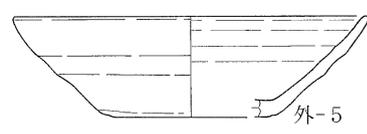
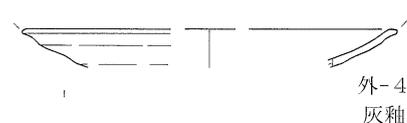
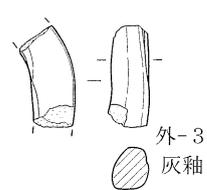
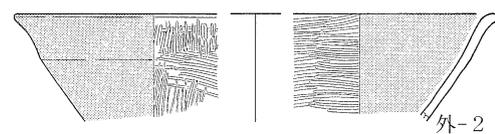
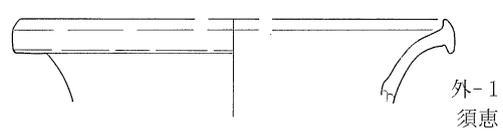
- 013 竪穴  
 1.黒褐色 ローム粒混ざる 根多くしまり弱い  
 2.黄灰褐色 ローム多い 床面付近  
 3.暗褐色 掘形の充填土か  
 4.黄灰褐色 ローム多い



009 出土遺物



遺構外出土遺物



第 19 図 013 実測図・出土遺物、009 出土遺物、遺構外出土遺物

被熱が弱い、廃絶時に祀るなどの可能性もある。カマド内出土の他の遺物をみると、4と5は左ソデ付近からの出土であり、内面を中心にススの付着が認められる。ともに残存度が半分以下の破片のため、カマド使用時に放り込まれたものと思われる。第15図6は甑であり、最奥部と燃焼面付近から4点に分かれて出土した。

**遺物** 土師器5,720.1g(内黒237.6g・比率4.2%)、須恵器400.3g、灰釉173.3g、須恵器(酸化焰焼成)328.9g、瓦47.8g(カマド芯材以外) 第15図9・10は、ともに床面直上から検出された。状況から見て、10の甕の内側に9が入れ子状になったまま潰れたものと推定される。垂直上からの圧力ではなく、西から東へと向かう力によって潰れたことがわかる。しかし、接合復元した状態で入れ子にしてみると、出土状況のようには重ならない。二つとも口縁部～頸部まではほぼ完存するが底部はなく、9は胴部の1/2を、10は1/3を失っている。15は内黒の鉢の底面のみである。割れ口を擦ってきれいし、再利用を試みたものと思われる。1/3ほどしか残存していないが、平面形は隅丸形状に加工したように見える。内面も擦られて滑らかとなっており、黒色処理が磨り減っている部位がある。16は覆土最上層より出土した緑釉の稜椀で体部内面に陰刻花文をもつ。18の灰釉壺は、床面出土の破片と16とほぼ同レベルの上層出土の破片が接合している。15の接合関係もほぼ同様の状況である。したがって、これらの遺物は堅穴の埋没時期に近いものとなる可能性がある。

#### 014 堅穴 (第14図、図版5・9)

**遺存状況** 010 堅穴と南西隅で重複、床面の一部と周溝のみ残存、南半中央付近に電柱の基礎があるため未調査部分あり **規模** 3.16m×3.02m ほぼ正方形 **壁高** 0～10.6cm(西壁付近)

**主軸方向** N-3° -E **周溝** 幅10.0～24.0cm・深さ2.9～12.7cm **柱穴** 検出されず

**ピット** P1:深さ30.8～43.7cm、P2:16.5cm、P3:49.1cm P1からは第14図1・5の土師器杯など数点が出土しており、床下掘り形の可能性もある。P2は堅穴より新しいものである可能性が高い。P3は010カマドの東脇に位置するが、位置的に014に伴うものと判断した。

**床面** カマド前から北側にかけて一部硬化 貼り床 **床面レベル** 27.16m前後 掘り形は010と同様 **カマド** 東壁南隅寄りに位置 床面に白色粘土が散る 燃焼部掘り形と焼土のみ残存

**所見** 層位的に新旧関係は捉えられなかったが、平面的には010カマドの東端を014の周溝が切っている状況が見られたため、014は010より新しい堅穴であるとおもわれる。

**遺物** 土師器648.9g(内黒75.5g・比率11.6%)、須恵器276.6g、灰釉118.8g 内黒の土師器杯の小片に墨書が残っていた。文字上部2/3程度しか残存していないが、文字は「国」もしくは「匡」とみられ、八千代市権現後遺跡190号堅穴出土の「匡」と類似する。しかし、「王」と思われる部位に縦線が2本書かれているように見えるため、別の文字である可能性も否定できない。

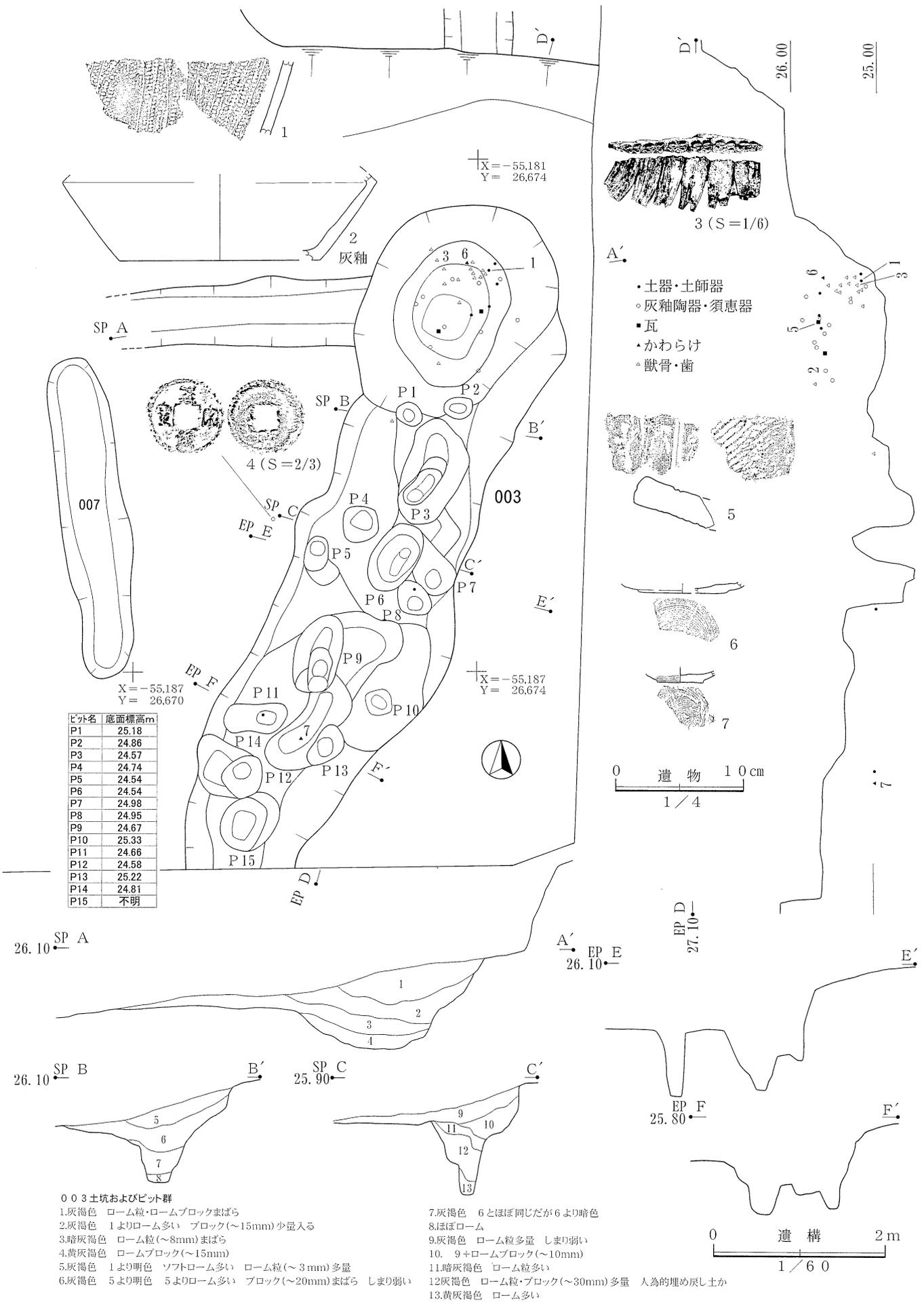
#### 013 堅穴 (第19図・図版5・9・11)

**遺存状況** 西半2/3の掘り形のみ残存、周溝・柱穴・床面・カマドなし

**規模** 2.86m×2.9(推定)m **壁高** 0～13.0cm(北西隅付近) **主軸方向** N-6° -W

**ピット** P1:深さ21.1cm、P2:12.7～23.5cm P2内および覆土中から、第19図1の緑釉椀が出土する。P2は不整形であり、堅穴の掘り形である可能性が高い。 **床面レベル** 推定27.17m前後

**遺物** 土師器1,255.9g(内黒14.8g・比率1.2%)、須恵器276.6g、灰釉172.2g、緑釉58.1g、瓦290.8g 1の緑釉陶器の椀は、同一個体だが接合しない破片が5点ある。



第20図 003・007 実測図、003 出土遺物



中世の段階において土坑に投棄されたものであると判断した。

土坑から南に延びるピット群の覆土は、土坑の覆土よりやや明色であった。ピット群は土坑から南端にかけて、中央にやや径の大きめのピット(P3・P6・P12・P15)が列をなし、その両脇に径の小さめのピット(P4とP7、P5とP8、P9とP10、P11とP13)が対に配されているようにみられる。ピットは、傾斜地に掘りこまれているため「深さ」を規定することが難しい。遺構の上場線から計測すると深さ36cm～138cmとなるが、第20図に各ピット底面の標高を示す。ピットはほぼ垂直に掘り込まれており、その形状から柱など棒状のものを立てるための掘り形であろうと推測されるが、用途目的は判然としない。稲荷台遺跡の獣骨を伴う祭祀土坑とは、時期・性格ともに異なるものであろう。

#### 遺構外一括遺物 (第19図・図版10)

第19図2は外面にも黒色ミガキが施される。8は凸面布目の平瓦である。光善寺廃寺跡の瓦として知られるタイプであり、この調査で唯一1点のみの出土である。

#### まとめ

市原古道遺跡として周知されてきた古代道の路線において、今回の調査では大規模な切り通し部分を検出した。ただ実際には中世段階においてかなりの改作がなされており、原形を留めている箇所があるかどうか疑わしいが、現代の道路の改修・拡幅状況を鑑みる時、それもまた当然の結果といえる。

この道路跡の開削時期はいつ頃なのだろうか。奈良時代まで遡る遺物としては、005溝跡から出土した均整唐草文軒平瓦と、009溝跡の円面硯である。この平行する2条の溝跡が開削当初の路線に伴い、なんらかの区画として規定するものである可能性は極めて高い。014堅穴が009溝跡にほぼ接していることは、すでに堅穴の位置を決める時点でこの溝が機能していなかったことを示す。

そもそも当初よりこれほど深い切り通しであったのだろうか。台地上を北へ緩やかに下って行くにあたって、ここまで深く掘り込むための地形的要因は見当たらない。とすると、地域や勢力を分断するような政治的、さらに言うなら軍事的目的を果たすものとして考えることもできる。路面を遮断する008溝跡の存在も、そのことを示唆する。台地上地山から3mも掘り込まれた最下層路面(I面)もまた、後世の手直しが加えられている可能性を考慮にいれなければならない。そのような緊張状態が発生する時期を検討することで、道路跡の改作時期やその規模の必然性がみえてくるであろう。

西側平坦面に存在する堅穴建物は、その主軸がある程度道路跡を意識するものであり、路面の開削より後出するものと思われる。出土遺物は9世紀後半のものが多くみられる。東方250mに位置する千草山遺跡でもこの時期に堅穴の増加がみられ、瓦を利用したカマドの構築は140号堅穴等4軒があり、010堅穴と時期をほぼ同じくする。その北側の郡本大宮遺跡でも、9世紀代に堅穴が増加傾向を示す。このように周辺遺跡が平安時代前半期に画期を有していることは見逃せない事象である。

この台地一帯は、光善寺廃寺跡をはじめ、古甲遺跡、郡本遺跡、上細工多遺跡そして稲荷台遺跡など分散型の国府域を視野に入れた広域的検討を要する地域である。道路跡は、分散する上総国府関連施設を結び、国府域外へと延びる主要な南北道路として機能していた可能性を秘めている。稲荷台遺跡と周辺の千草山遺跡や郡本大宮遺跡などとあわせて集落の分析をなすことで、国府集落の展開を想定し、国府域の実態に迫る一助となることができるのではないだろうか。

第3表 稲荷台遺跡出土遺物観察表

遺構	番号	種類	器種	口径 残存	底径 残存	最大径	器高	胎土・含有物	焼成	色調	調整	その他
001	1	陶器 甕	甕	16.2 1/26				灰：緻密 長石 (0.5~5.5mm)	良好	黒~暗灰	横ナデ	上方から自然疎降灰
001	2	陶器 甕	甕					灰：緻密 長石 (~1.0mm)	良好	暗灰~灰	外面タタキ、内面横へラナデ	袖なし、割れ口辺際り痕
001	3	陶器 甕	甕					灰白：緻密 黒色粒若干	良好	灰オリーブ	外面格子タタキ、内面横へラナデ	外面全面自然疎、割れ口1辺際り痕
001	4	白磁 中皿	碗		6.3 1/4			白：緻密 黒色粒若干	良好	淡青白	付け高台、見込みに鬚線、放射状に櫛目文	広東系碗、11C末~12Cくらいか
001	5	陶器 常置	こね鉢					灰：長石・石英(~1.6mm)多い	良好	赤褐		外面に櫛目条線、口縁内側部に捺り痕
001	6	陶器 常置	こね鉢	13.0 1/8				灰：砂粒・長石・石英(~1.8mm)多い	良好	灰白	付け高台	高台付こね鉢
001	7	緑釉陶器	椀		7.2 1/6			灰白：緻密	良好	淡緑	内外面へラミガキ後淡緑色釉全面施釉、付け高台	割れ口縁り跡、擬似口縁状、高台や や内湾きみ、尾張産
001	8	灰釉陶器	甕	13.6 1/16				灰白：やや粗め 長石(~ 0.2mm)・黒色粒	良好	灰白~淡 緑	横ナデ、内面~口縁淡緑釉	口径は参考値、捺投産
001	9	灰釉陶器	甕		13.4 1/5			灰：緻密 長石(~0.6mm)	良好	灰	横ナデ、付け高台	底面施釉、内面底面両面に捺り痕あり
001	10	灰釉陶器	甕		8.1 1/5			灰白：黒色粒(~0.7mm)多い	良好	淡緑~緑	横ナデ、付け高台	捺投産
001	11	灰釉陶器	椀		7.0 1/5			淡灰：長石(~0.6mm)	良好	灰白	底面回転糸切り、付け高台	三日月高台
001	12	須恵器	小壺	8.0 1/6		9.2		灰：白色粒(~0.4mm)	良好	灰	横ナデ	永田・不入窯産
001	13	須恵器	杯		10.0 1/4			灰：白色粒(~0.1mm)、骨針	良好	灰	体部下端~底面回転へラ削り、付け高台	見込み捺り痕、永田・不入窯産
001	14	須恵器	壳					灰：粗い、白色粒(~0.2mm)多い	良好	灰~暗灰	櫛目波状文	須部
001	15	須恵器	壳類	36 1/21				細砂粒(白(~0.3mm)多い・雲母 等)	良好	褐灰	横ナデ	折り返し状口縁、口径は参考値、千 葉市城産、酸化塩焼成
001	16	須恵器	壳類					細砂粒(白・黒・雲母等)	良好	にぶい赤 褐	外面タタキ	須部付近、千葉市城産、酸化塩焼成
001	17	須恵器	壳類					細砂粒(白・雲母・骨針等)	良好	褐灰	外面タタキ	胴部片、千葉市城産、酸化塩焼成
001	18	土師器	壳	11.6 1/6				細砂粒(白・石英・雲母等)	良好	暗褐	口縁部横ナデ、胴部外面縦へラ削り・内面横へラ ナデ	小ぶりな壳、口唇丁寧なつくり
001	19	土師器	壳	26 1/25				細砂粒(雲母等)	良好	褐~暗褐	口縁部横ナデ、胴部外面縦へラ削り ・内面横へラナデ	口縁~頸部、口径は参考値
001	20	土師器	香付鉢		10.0 1/8			細砂粒(白・雲母等)	良好	にぶい橙	横ナデ	脚部
001	21	土師器	杯					細砂粒(白・雲母・骨針等)	良好	にぶい橙	横ナデ	胴部片、墨書あり、「多」か、体部 土器に少なくともさらに1文字あり
001	22	土師器	杯		5.2 2/3			細砂粒(白・雲母等)	良好	にぶい橙	ロクロ成形、体部下端回転へラ削り、底面回転糸 まり後手持ちへラ削り、付け高台、内面黒色ミガキ	
001	23	土師器	杯		5.6 3/4			細砂粒(白・石英・雲母等)	良好	にぶい橙	ロクロ成形、底面静止へラ削り	
001	24	須恵器	転用土罐			6.2		細砂粒(白・骨針等)	良好	褐灰	外面タタキ、周辺打ち欠き8ヶ所、側目3ヶ所	破片加工品、器身に使用痕跡希 薄、千葉市城産、酸化塩焼成
001	25	瓦	平瓦					細砂粒(白・黒・雲母等)	良好	にぶい橙	内面布目、凸面縄タタキ	5点接合
001	26	瓦	平瓦					細砂粒(白・黒・雲母・骨針等)	良好	橙	内面布目、凸面格子タタキ	この調査区で格子タタキの瓦は2点 のみ
002	1	土師器	甕	20.6 1/6		16.1		中砂粒(白・黒・雲母・骨針等)	良好	にぶい橙	口縁内外面横ナデ、胴部外面縦へラ削り・下方横 へラ削り、胴部内面横へラナデ	
002	2	土師器	杯	14.1 1/14				細砂粒(白・骨針等)	良好	にぶい橙 ~黒	ロクロ成形、内面黒色ミガキ	体部やや屈曲する
002	3	土師器	皿	18.8 1/8				細砂粒(白・骨針等)	良好	にぶい橙	ロクロ成形、内面黒色ミガキ	
002	4	土師器	杯	13.1 1/8				細砂粒(白・黒・雲母・骨針等)	良好	褐	ロクロ成形、体部下端手持ちへラ削り、付け高 台、内面黒色ミガキ	
002	5	土師器	杯	10.3 1/2	5.2	3.5		細砂粒(白・骨針等)、白多い、	良好	にぶい黄 橙	ロクロ成形、底面糸切り無調整	
002	6	土師器	杯	13.2 1/6				細砂粒(白・黒・雲母・骨針等)	良好	にぶい橙	ロクロ成形、内面黒色ミガキ	
002	7	土師器	椀		7.8 1/3			細砂粒(白・黒・赤・骨針等)	やや甘い	淡橙	内面黒色ミガキ、付け高台	高台頸部欠損
003	1	縄文土器	深鉢						良好		後期屈之内1式 単座LR縄文地文 法線	005付近の擾乱から出土した破片 と接合
003	2	灰釉陶器	平瓶			24.4		灰白：長石(~1.2mm)・黒色粒(~ 0.4mm)	良好	灰白	外面回転へラ削り、内面横ナデ、高台無し	捺投産
003	3	ウマ下彌	別長1・2参照									
003	4	銭	聖宋元寶			2.3		重量2.1g			篆書	北宋銭、初铸1.101年
003	5	瓦	平瓦					中砂粒(白多い)	良好	暗灰	内面布目、凸面縄タタキ	
003	6	かわらけ	皿		7.0 1/3			細砂粒(白・雲母・骨針等)	やや甘い	明黄褐	底面回転糸切り無調整	
003	7	かわらけ	皿		3.6 1/2			細砂粒(白・雲母・骨針等)	良好	明黄褐	底面回転糸切り無調整	
005	1	瓦	平瓦					細砂粒(白・雲母等)	良好	明赤褐	内面布目、凸面縄タタキ	指紋残る
005	2	瓦	軒平瓦					細砂粒(白・雲母等)	良好	にぶい橙		均整唐文、瓦当部のみ
005	3	須恵器	壳			32		灰白：白色粒(~0.5mm)	良好	灰	外面タタキ、内面縦へラ削り	割れ口、外面ともに捺り痕あり
009	1	須恵器	前面硯			22.4	4.6	灰：白色粒(~0.8mm)多い	良好	灰	ロクロ成形、沈線文、方形透かしあり	同期内面硯、脚部
010	1	支脚				8.0	16.9	中砂粒(白・赤等)	甘い	淡黄	再整縮み上げ、手捏の筒形	被熱のため表面割傷
010	2	土師器	杯	11.6 1/5	5.6	7.3		中砂粒(白・赤・黒・骨針等)	良好	にぶい黄 橙	ロクロ成形、体部下端~底面回転へラ削り、 内面黒色ミガキ	カマド内、支脚の裏に伏せて置かれ る。口唇頸部は2・3ほど欠損
010	3	土師器	杯		6.8			細砂粒(白・赤・骨針・雲母等)	良好	橙	ロクロ成形、体部下端~底面回転へラ削り、 内面へラミガキ	カマド内出土
010	4	土師器	杯	12.8 1/6	5.0 1/3	3.7		中砂粒(白・赤・骨針等)	良好	橙	ロクロ成形、体部下端~底面手持ちへラ削り	カマド内出土
010	5	土師器	杯	13.3 1/15	6.1 1/2			細砂粒(白・雲母・骨針等)	良好	橙	ロクロ成形、底面回転糸切り無調整	カマド内出土
010	6	土師器	瓶	28.0 1/8		胴部径 26.6		中砂粒(白・赤・石英・雲母・骨 針等)	良好	橙~にぶ い黄褐	口縁部横ナデ、胴部外面縦へラ削り、 内面横へラナデ	カマド内出土
010	7	土師器	杯	16.1 1/4	8.2 1/3	5.5		細砂粒(白・赤・雲母・骨針等)	やや甘い	橙	ロクロ成形、体部下端~底面回転へラ削り、 内面見込みにへラミガキ	
010	8	土師器	杯	13.8 1/5	5.7 1/4	3.9		中砂粒(白・赤・石英等)	良好	にぶい黄 橙	ロクロ成形、胴部下端~底面回転へラ削り	
010	9	土師器	壳	23.0		胴部径 22.1		中砂粒(白・黒・赤・石英・骨針 等)	良好	黒褐~暗 褐	口縁内外面横ナデ、胴部外面縦へラ削り・胴部下 半横へラ削り、胴部内面横へラナデ	10の壳の中に入れた子状とありカマド の前60cmほどの床面底上でつぶれ て検出
010	10	土師器	壳	24.6		胴部径 23.0		中砂粒(白・黒・石英・雲母等)	良好	にぶい橙 ~暗褐	口縁内外面横ナデ、胴部外面縦へラ削り・下 部横へラ削り、胴部内面横へラナデ	このカマドとしてつぶれて出土、9上 りやや大きい
010	11	土師器	杯	20.2 1/8				中砂粒(白・石英・骨針等)	やや甘い	褐	ロクロ成形	

遺構	番号	種類	器種	口径 残存	底径 残存	最大径	器高	胎土・含有物	焼成	色調	調整	その他
010	12	土師器	杯	12.4 1/2				細砂粒(白・骨針等)	良好	橙	ロクロ成形	
010	13	土師器	杯蓋			1.9		細砂粒(白等)	良好	橙	ロクロ成形	つまみ部分のみ
010	14	土師器	杯蓋	12.8 1/4	6.7 1/2		4.5	細砂粒(白・黒・赤・骨針等)	良好	橙	ロクロ成形、体部下端回転ヘラ削り、底面回転糸切り後回転ヘラ削り、付け高台、内面へ口唇外面黒色ミガキ	
010	15	土師器	鉢		11.0 1/3			細砂粒(白・骨針等)	良好	にぶい橙	体部下端回転ヘラ削り、底面ヘラミガキ、内面黒色ミガキ	割れ口を擦って筒状に加工 内面擦り痕
010	16	緑釉陶器	碗	14.0 1/6				灰白：緻密	良好	淡緑	内外面ヘラミガキ後内面に陰刻花文、全面淡緑色施釉	尾張産
010	17	灰釉陶器	長頸壺					灰白：やや粗め 長石(～1.2mm)若干	良好	灰白	ロクロ成形横ナデ、内外面淡緑～オリーブ色自然釉	
010	18	灰釉陶器	壺			13.8		灰白：緻密 長石(～0.7mm)	良好	淡緑～オリーブ	ロクロ成形横ナデ、外面オリーブ～淡緑色釉	二次被熱、外面の釉が剥離しやすい状態、美濃産か
010	19	灰釉陶器	皿		7.8 1/5			灰白：やや粗め 長石(～0.9mm)多い	良好	灰白	底面回転糸切り後付け高台、重ね焼き痕あり	見込み擦り痕あり 高台にヘラ押し痕あり 美濃産か
010	20	須恵器	壺・甕類					灰：緻密 白色粒(～0.3mm)	良好	灰白	外面タタキ、内面あて具痕あり	永田・不入監
010	21	須恵器	甕類	24 1/12				細砂粒(白・赤・石英等)	良好	橙	口縁部横ナデ、胴部外面タタキ・内面横ナデ	千葉市産、酸化焼成
010	22	須恵器	甕類			26		細砂粒(白・雲母等)	良好	暗赤褐	胴部外面タタキ・内面横ヘラナデ	千葉市産、酸化焼成
010	23	瓦	平瓦					中砂粒(白・赤・黒・雲母等)	良好	にぶい橙	凹面布目、凸面縄タタキ	カマドの裏壁材として使用 3,780 g
010	24	瓦	平瓦					中砂粒(白・赤・黒等)	良好	にぶい黄橙	凹面布目、凸面縄タタキ	カマドの右壁材として使用 3,505 g
010	25	瓦	平瓦					細砂粒(白・赤等)	良好	灰～橙	凹面布目、凸面縄タタキ	カマドの左奥壁材として使用 2,068.3 g
010	26	瓦	平瓦					細砂粒(白・赤・雲母等)	やや甘い	にぶい黄橙	凹面布目、凸面縄タタキ	カマドの左前壁材として使用 1158.1 g
010	27	瓦	平瓦					中砂粒(白・赤・黒・雲母等)	良好	にぶい橙～赤褐	凹面布目、凸面縄タタキ	カマドの天井材として使用、凹面激しく被熱しスス付着 1,552.9 g
010	28	瓦	平瓦					中砂粒(白・赤・黒・雲母等)	良好	にぶい橙～赤褐	凹面布目、凸面縄タタキ	27と同一個体だが別箇所で使用、カマド最上層出土 908.0 g
010	29	瓦	平瓦					中砂粒(白・赤・黒・雲母等)	良好	橙	凹面布目、凸面縄タタキ	27と同一個体、略穴床面より出土、凹面激しく被熱のためカマドの材であったと思われる 288.3 g
010	30	瓦	平瓦					中砂粒(白・赤・黒・雲母等)	良好	橙	凹面布目、凸面縄タタキ	27と同一個体だが被熱痕跡なし、カマドの別箇所でも素材として使用か 213.6 g
010	31	瓦	平瓦					細砂粒(白・赤等)	良好	灰	凹面布目、凸面縄タタキ	カマドの左壁材として使用、凹面激しく被熱しスス付着 771.9 g
010	32	瓦	平瓦					細砂粒(白・赤等)	良好	灰	凹面布目、凸面縄タタキ	カマドの左壁材として使用、部分的に激しく被熱 392.7 g
010	33	瓦	平瓦					細砂粒(白・赤等)	良好	灰～にぶい橙	凹面布目、凸面縄タタキ	カマドの焼き口出土、凹面被熱、スス付着 561.8 g
010	34	瓦	平瓦					細砂粒(白・赤等)	良好	にぶい黄橙	凹面布目、凸面縄タタキ	支脚の右脇出土、天井あるいは右壁材か 486.3 g
010	35	瓦	平瓦					細砂粒(白・赤等)	良好	にぶい黄橙	凹面布目、凸面縄タタキ	34と同一個体、支脚の右脇出土、天井あるいは右壁材か
010付近	36	土師器	甕	21.4				中砂粒(白・黒・赤・石英・骨針等)	やや甘い	橙	口縁部横ナデ、胴部外面縦ヘラ削り、内面横ヘラナデ	010付近(北側隣接エリア)から出土
010付近	37	土師器	杯	13.3 1/2	7.5	4.3		細砂粒(白・赤・雲母・骨針等)	良好	橙	ロクロ成形、体部下端回転ヘラ削り、底面回転糸切り無調整	010付近(北側隣接エリア)から出土、内外面に明瞭なロクロ目
010付近	38	土師器	杯	12.4 1/3	7.0 1/5	4.4		細砂粒(白・赤等)	良好	橙～灰褐	ロクロ成形、体部下端～底面手持ちヘラ削り	010付近(北側隣接エリア)から出土、内面に漆状黒色物付着、一部器壁とともに剥離
012	1	土師器	甕	25.6 1/4		25.9		中砂粒(白・黒・赤・雲母・石英等)	良好	橙～褐	口縁部横ナデ、胴部外面縦ヘラ削り・内面横ヘラナデ	頸部輪筋のみ残存
012	2	灰釉陶器	碗		7.0			灰白：緻密、長石・石英等(～2.5mm)	良好	灰白	付け高台、一部自然釉	美濃産か
012	3	鉄製品	刀子				現存長16.0cm					端部曲がるが残る 22.8 g
013	1	緑釉陶器	碗	15.0 1/16	7.0 1/3		5.5	灰：緻密、白色鉱物(～0.3mm)若干	良好	淡緑	淡緑色の釉が全面にかかる、内外面ヘラミガキ、付け高台	見込み部分釉が残り剥離 尾張産
013	2	灰釉陶器	皿	14.9 1/9	6.8 1/2		2.6	灰白：長石・石英・黒色粒等(～0.8mm)	良好	灰白	ロクロ成形、底面回転糸切り後回転ヘラ削り 素地?	見込み部分擦り痕あり 美濃産
013	3	須恵器	甕			23		灰白：長石若干	良好	灰白	外面タタキ、内面横方向ヘラ削り	東海産か
013	4	土師器	甕			19.2		細砂粒(白・骨針等)	良好	にぶい赤褐～黒	頸部横ナデ、胴部外面縦ヘラ削り・内面横ヘラナデ	
013	5	土師器	杯	14.4 1/4	7.2 1/2		4.0	細砂粒(白・黒・赤・雲母・骨針等)	良好	にぶい黄褐	ロクロ成形、体部下端回転ヘラ削り、底面手持ちヘラ削り	
013	6	土師器	杯	14.0 1/2	7.2 1/2		4.4	細砂粒(白・黒・赤・骨針等)	良好	橙	ロクロ成形、体部下端回転ヘラ削り、底面回転ヘラ削り	
013	7	土師器	杯	14.2 1/4	7.2 1/3		5.0	細砂粒(白・赤・骨針等)	良好	橙	ロクロ成形、底面回転糸切り無調整	
014	1	土師器	杯	12.0 2/3	5.5		4.0	中砂粒(白・石英・骨針等)	良好	にぶい橙～暗褐	ロクロ成形、体部下端～底面手持ちヘラ削り	
014	2	土師器	杯		7.6 1/3			細砂粒(白色粒等)	良好	にぶい黄橙～黒	ロクロ成形、内面黒色ミガキ、口縁部外面黒色処理	墨書あり「同」「馬」か?
014	3	土師器	杯		7.6 1/3			細砂粒(白・骨針等)、白多い	良好	にぶい赤褐	ロクロ成形、底面回転ヘラ削り、内面黒色ミガキ	二次被熱
014	4	灰釉陶器	壺			21.4		灰白：長石・黒色粒等(～1.2mm)	良好	灰白	外面回転ヘラ削り、内面横ナデ	美濃産、一部自然釉
014	5	土師器	杯	13.4 1/3				細砂粒(白・赤・雲母・骨針等)	良好	にぶい橙	ロクロ成形	
014	6	土師器	台付甕		7.6 1/2			細砂粒(白・赤等)、白多い	良好	にぶい赤褐～橙	外面ヘラ削り、台部分端部指押し調整、内面ヘラ削り	台部のみ、指紋多く残る
遺構外	1	須恵器	壺	16.8 1/12				灰：長石(～1.5mm)・黒色粒	甘い	灰オリーブ	外面回転ヘラ削り、自然釉	
遺構外	2	土師器	手付き瓶	19.0 1/16				細砂粒	良好	黒	内外面黒色ミガキ	
遺構外	3	灰釉陶器	手付き瓶					灰白：白色微粒・黒色粒(～0.3mm)若干	良好	灰白	オリーブ色灰釉施釉	把手部分、美濃産
遺構外	4	灰釉陶器	皿	14.8 1/12				灰白：白色微粒・黒色粒(～0.2mm)若干	良好	灰白	内面のみオリーブ色灰釉刷毛塗り	美濃産
遺構外	5	土師器	杯	13.8 1/4	6.4 1/4		4.0	細砂粒(白・黒・赤・骨針・雲母等)	良好	橙	ロクロ成形・底面回転糸切り無調整	
遺構外	6	土師器	杯		5.0			細砂粒(赤・雲母等)	やや甘い	橙	ロクロ成形・底面回転糸切り無調整	
遺構外	7	かわらけ	皿	11.4 1/4				細砂粒(白・雲母等)	良好	黄橙	ロクロ成形	
遺構外	8	瓦	平瓦					細砂粒(白・赤・雲母等)	やや甘い	にぶい黄橙	凹面格子目タタキ・凸面布目	光善寺タイプか

※口径・底径などの単位はcm

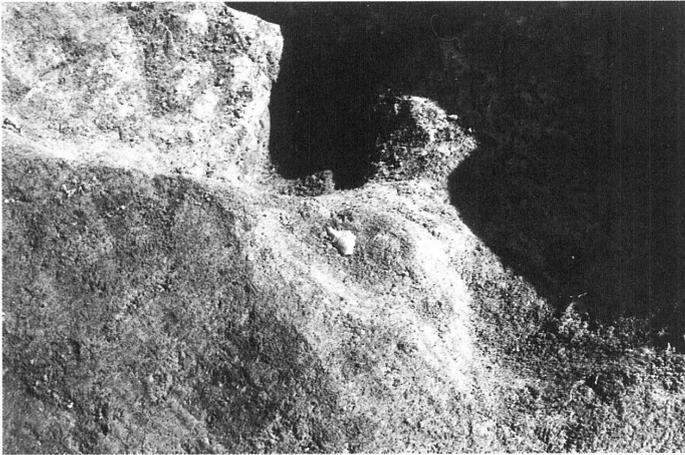
残存度は分数で表し、口径等数値のみの場合は完存を示す



第1トレンチより調査区を眺む（南西から）



第1トレンチ拡張部（北西から）



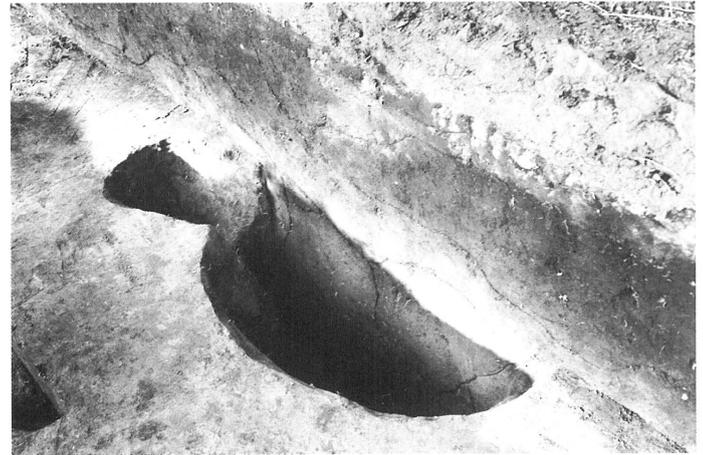
第1トレンチ石鏃出土状況（北西から）



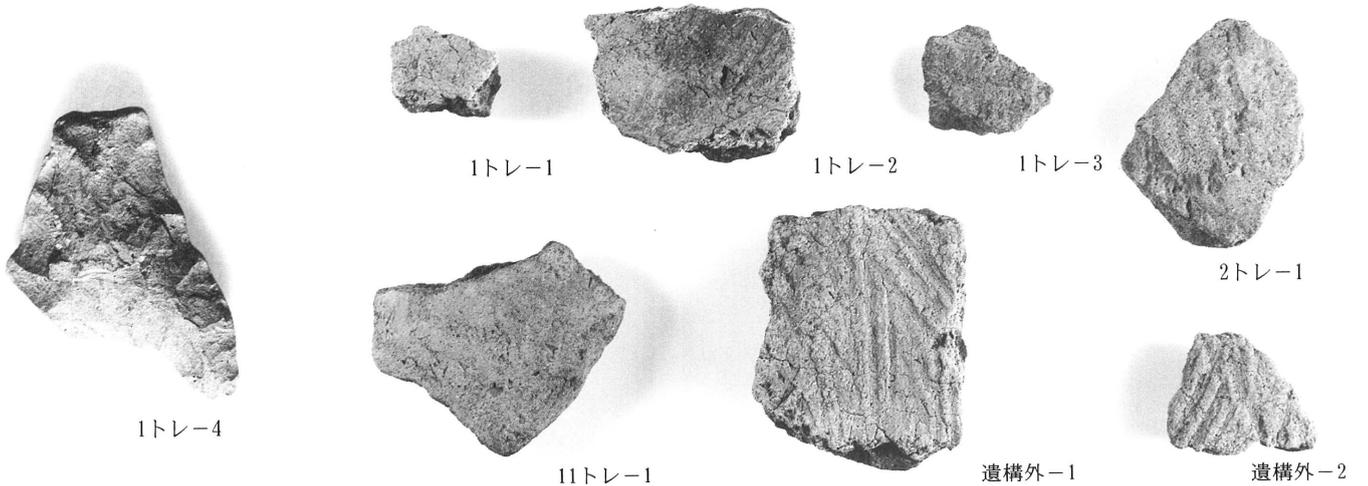
第3トレンチ土坑・溝検出状況（東から）



第13トレンチ道跡検出状況（西から）



第14トレンチ土坑検出状況（南東から）



1トレ-1

1トレ-2

1トレ-3

1トレ-4

11トレ-1

2トレ-1

遺構外-1

遺構外-2



調査前 北から



調査前 南から



調査前 西側斜面



調査開始直後



001・003全景 南から空撮



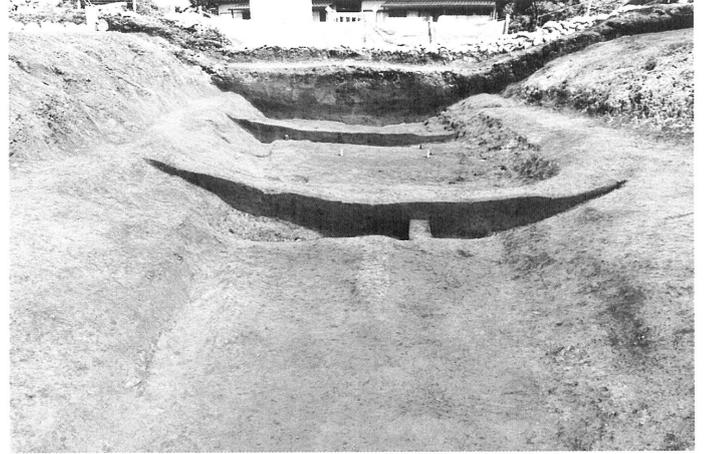
001遺物出土状況 南東から



001土層断面B-B' 北東から



001土層断面B-B' 北東から



001路面 南から



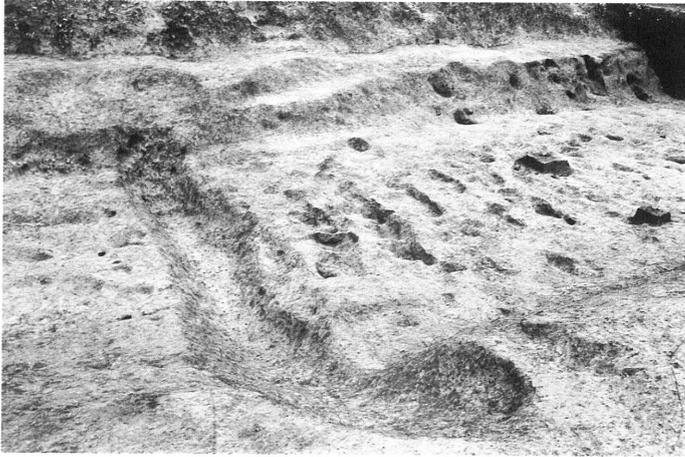
001全景 南から



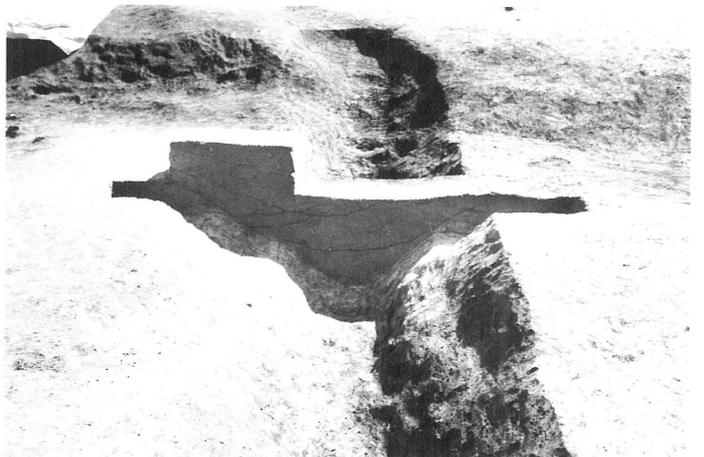
001土層断面 A-A' 南東から



001南端路面掘り形 南から



008と001掘り形 東から



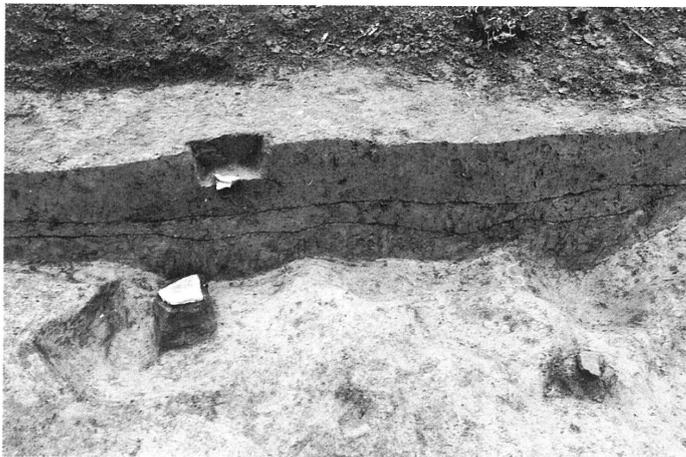
008土層断面 D-D' 西から



001掘り形 南から



001・003・005 南から



001遺物出土状況 B-B' 付近



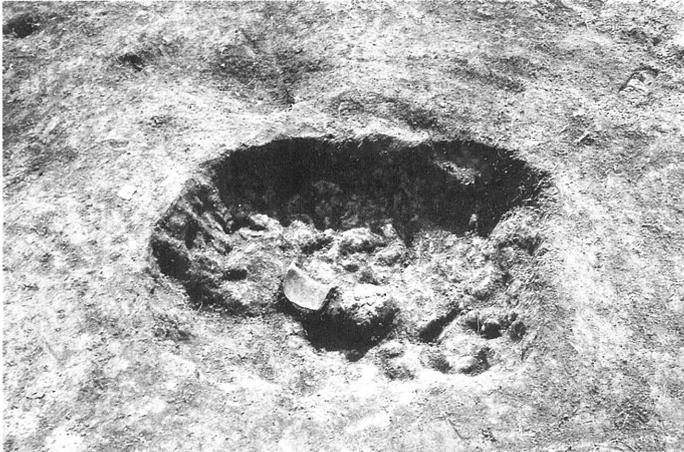
005 北東から 右奥は001掘り形



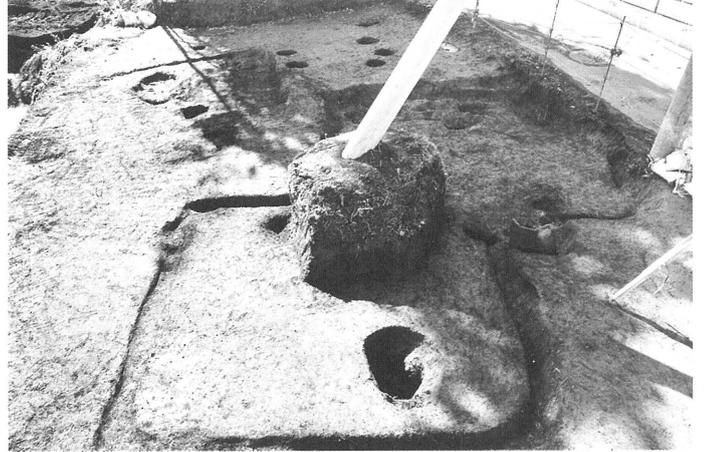
009 南から



002・011・012 西から



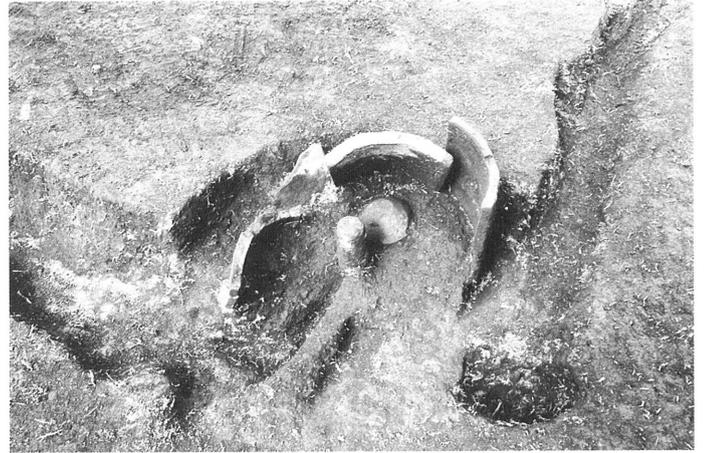
012 北から



014・010 北から



010カマド 南東から



010カマド 天井部取り外し後 南東から



010 甕出土状況 南から



013 南西から



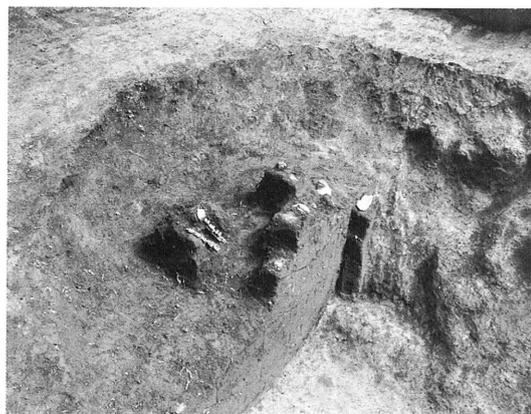
003 北から



003 南から



調査区より南方面を臨む

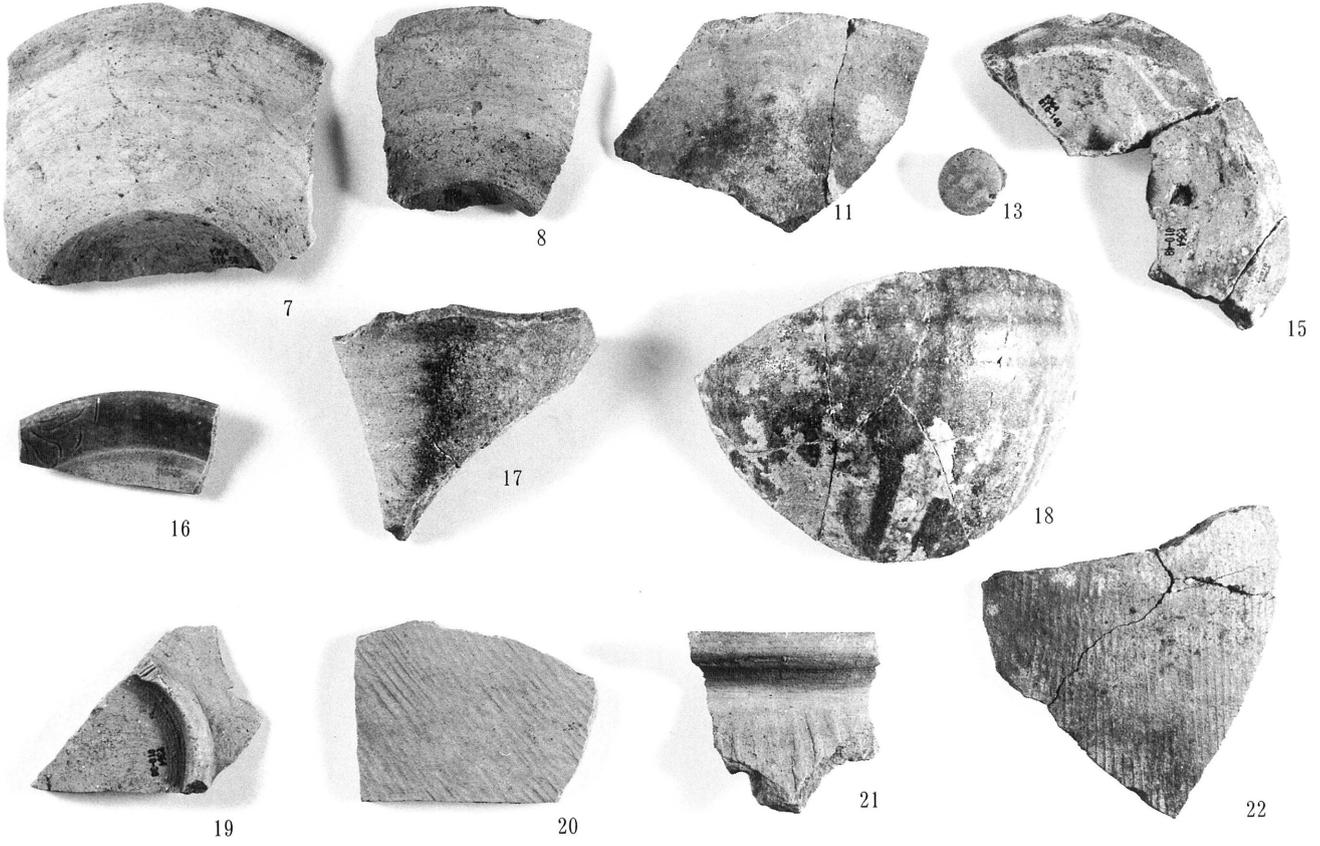


003 獣骨・歯 出土状況

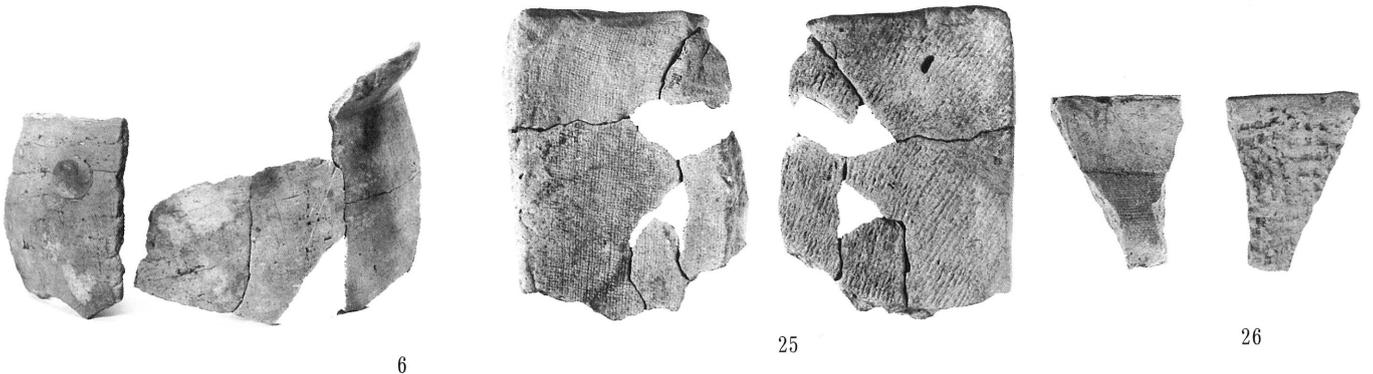
010カマド内出土遺物



010出土遺物



001出土瓦





# 抄 録

ふりがな	へいせいじゅうよねんどいちほらしないいせきはつくつちようさほうこく							
書名	平成14年度市原市内遺跡発掘調査報告							
副書名	椎津新林遺跡・稲荷台遺跡							
巻次								
シリーズ名	市原市内遺跡発掘調査報告							
シリーズ番	第16冊							
編著者名	北見 一弘・牧野 光隆							
編集機関	財団法人市原市文化財センター							
所在地	〒290-0011 千葉県市原市能満1,489番地 TEL 0436-41-7300							
発行年月日	2003年3月12日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しいつしんばやしせいせき 椎津新林遺跡	ちばけんいちほらし 千葉県市原市 しいつあざしんばやし 椎津字新林2,210-1	12219	セ360	35度 26分 43秒	140度 02分 32秒	20020311 ～0325	4,161㎡ のうちの 416㎡	仮設道路建設
いなりだいいせき 稲荷台遺跡	ちばけんいちほらし 千葉県市原市 ふじい 藤井1-187・ 1-189-1	12219	セ364	35度 30分 08秒	140度 07分 38秒	20020829 ～1010	662㎡	個人住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
椎津新林遺跡	包蔵地	縄文時代	土坑9基 道跡1条	縄文土器(縄文時代早期・前期) 土師器(古墳時代～中世)		昭和59・60年に調査された椎津中林遺跡に隣接する。縄文時代早期・前期の土坑及び古代～中世と推定する道跡を検出した。		
稲荷台遺跡	道路跡 集落跡	平安時代	道路跡1条 溝跡2条 竪穴跡5軒 土坑1基	土師器・須恵器・灰釉陶器・ 緑釉陶器・瓦・鉄製品		市原古道遺跡(古代官道)としても知られる平安時代からの道路跡が切り通し状で検出され、中世前半期に大幅な改作がなされていることが判明した。		
		中世	溝跡1条 土坑1基	陶磁器・かわらけ ・獣骨				

## 平成14年度 市原市内遺跡発掘調査報告

平成15年3月6日 印刷

平成15年3月12日 発行

編 集 財団法人 市原市文化財センター

市 原 市 能 満 1 4 8 9

発 行 千葉県市原市教育委員会

市原市国分寺台中央1-1-1

印 刷 三 陽 工 業 株 式 会 社

市 原 市 五 井 5 5 0 1 - 1

